
馬 駆ける

しらせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬 駆ける

【Zコード】

N4327Z

【作者名】

じりせ

【あらすじ】

受験に失敗し進路を絶たれた力ケリ、そんな彼女の前に現れたのは若草区の新人区長マケンドー。敗北者に選択の余地はなし。マケンドーがカケリを欲したその理由とは…？裸足で駆ける馬となれ！恋とトラブルとレースがノンストップなラブコメディ サイトで連載中のものと同じ内容です。2010/6/6～連載、第十四話まで掲載中。

第一話 敗北、そこから始まる物語

敗北…、それは悔しき一文字。人生においてできるひとなら味わいたくない、それが敗北。

様々な敗北がこの世にはあることだろう。個人にもよるが。勝負事だったり、夢だったり、恋だったり、大きなことから些細な事まで、敗北、できることなら…経験したくないものだ。

彼女、マドウ・カケリ十五歳もまた、人生の敗北者となってしまった。

進学をかけての受験と言つ名の戦争に、おもいつきり負けたのだ。人生、しかし失敗から立ち直れる、這い上がれることだって不可能じゃない。あきらめることも嘆く事も、けして悔しいだけで終るわけじゃない。

が、：彼女力ケリは両親と賭けをしていたのだ。受験と言つ進路をかけて、それは彼女の自由をかけての一世一代の勝負であった。：わけだが。

「うつぐわーーー、なんたることだーーー」

不合格の悲痛な三文字。ああもう終つた、あたしの人生ここで試合終了した。うぐわーーー。

うち、マドウ家は自慢じゃないが豊かではない家だ。しかも両親が揃いも揃つて亡者がつくほどの守銭奴だつたりする。唯一の子供である、いわば宝でしょ？宝。たつた一人の娘だよ！多感なお年頃だよ！そいでもつていろいろ夢見たり憧れたり、人生これからが樂しくなるつて言う、そんな年頃だよ？

一年前の進路相談の時に、あたしは迷わず進学希望だつたわけ。さすがに天下の国立学校なんぞむりだけど、若草区立の高等学校には通いたい。将来の為、なんていうと夢をしつかり持っている子だつ

て思われただけど、… 実のところ夢に憧れるレベルっ子だつたりして。… そこをね、ついてきたわけよ、うちの親は。

「ふーん、あんたさー、学校出て? なに? しつかりとなにをしたいか決めてもいないんだろ?」

「ううう」

「だいたい、勉強もスポーツだつてなにかに秀でているわけでもなし。我が子ながら、… ねえ、早いうちにけじめつけたほうがいいと思うんだよ」

「なななな、なんですと?」

「酷いでしょ? 我が子にはなんの才能もないんだと、お前の人生あきらめるとですよ? 信じられます? おまけに…」

「ふー、… 子育てがここまで金のかかる事とは思わなかつたけど、しょーがないよね、生まれた以上は」

「はい? なんだこの最低な親たちは。」

しかも真顔でいつてるから、おそろしい。いやおおそろしいもなにも、あたしも慣れているんだよね。だって長年ともに暮らしてきた親子なんだもの。うん、一にも二にも金金金の守銭奴なんだー。そんなあたしにとつて、子供は宝物です（キラキラ。なんて他の子の親がとんでもない存在に思えてならなかつた。思つたところでうちはうちで、どうしようもない守銭奴だ。

「なあカケリ、お前なんか金になることしろよな。進学なんて、そんな金はうちには余つてないんだから」

ためいきまあじりにめんどくわせついで、この親どもはおっしゃつました。

「お前金にならない?」 と。

さすがにあたしもキレました。

あたしはなんのために生まれたか? この守銭奴どもの金になるためじゃない! きっとなにか、なにかあたしにしかできない大きな使命があつて生まれてきたんだ。それをなすためにも、進学させて

いただきますと…

「ふーん、… いつねー、なひで。 とりあえず受験は許してやひつ。

ただし、本命の一校のみな」

「うひうひ、本当…?」

「できるかどうか怪しいが、お前が受かるくらい力があるのなら、それは金になる才能がもしかしたらあるかもしないってことだからな」

金か…。

「わかつた。絶対に受かつてみせる。その時はあたしも覚悟を決めるから！ 約束は守つてよ！」

「おしおしわかつた。お前もダメだった時は、覚悟を決めて金になれよ」

半田の抑揚のない声の父にあたしは宣言した。合格決めて、自由を手にしてみせると。

そして一年後の春。 桜 散りました。

「ふつ…、壱つたとおりになつた」

「ねえー」

畜生の声がする。くすくすん。あたしの…自由は…絶たれてしまった。これでいいのか？ 人生、たしかに負けっぱなしだったけど、一度ぐらい勝ちがあつたつていいじゃないかーー！

ピンポーン

…。

ピンポーン

「ちょっと、お客さん來てるんじゃないの？」

下の階にいる守銭奴両親に呼びかけるが。

「あーもーめんどくさいなあ…。どうせ押し売りじゃないのか?」

めんどくせーなあ

「ねえいい加減にして欲しいわあ。うちには一円たりとも出す金なんてないっていうのにねー」

押し売りかどうかもわからないってのに。

まだ押してるよ。……あ、もーしょーがないなー。

たぐ、血室に貯わるものが落ち込む時間へりこ、そのへりこの血田へりこ許してよ。

ムジツノルセニアリヤ

二

「！」
君は

！？
何か驚いてる？ あ、あたしヘンな格好でもしている…かな

「……………」

「ああ失礼をした。私は先日この若草区の区長に就任したカクバヤ

「あだつづ」

さつきまで横になつてブサイク顔していた母が、いつのまにかあたしを押しのけて、凶長を出迎えていた。

今の人気が区長かー、あんな人だつたつけ？若草の区長つて？あたし受験でしばらくテレビとか見てなかつたし、世間の事には疎いな、受験で忙しかつたし…、やばい泣けるぜ。

区長さん変わつたばかりみたいだね。…にしてもずいぶん若い感じだな。イケメンだし。…母め、年甲斐もなく田をキラキラさせちやつて。父も、相手が区長だからつてにやにやくこく…はいお金と権力には絶対服従つてのがうちの親なんです。

「今日はどうされたんですか？ 就任の挨拶なり、この前にそれましたよね？」

お茶を出しながらの母の声。高じよ、いつもみつきーが高い。…なんかこっちが恥ずかしいわ。

部屋に戻りかけたあたしを、その区長が声で引き止める。

「実は…今日はマドウさんにお願いがあつてまいりました。誠に勝手なお願いになり恐縮なのですが…」

な、なんだろう？ まさか、お金の援助とかじゃないでしょうね？ 我が家でお金の援助などGぶつけりもいっこなんですよ新人区長さん！

「あのー、区長さんもしかして、先日おひしゃられただことですかね？」

ん？すでに話し合いがあつたこと？

「はい、あのお話のほうはすでになされて？」

「ええ！ そのことでしたらすでに解決済みですので。ぜひともお願ひします！」

うわっすっしー嬉しそうな母の声。こんな声色の時つて、お金が…入るときだよ！？ん？

「うちのカケリでしたら、どうぞ、お好きにしてやってください…あれになんの力があるかわかりかねますが、区長さんがおひしゃるのなら、問題ないでしょう。というか、お金になるなら、むづつちはええどんとここですかーーはつはつはーー」

ち、父ーーー？ 今なんとなんといった？

「ちょっとまつたーーー！ なに？なんの話？ あたしのこと話してなかつた？ 好きにしていいとか？ どうこうひとへー」

「なにも聞いてなかつたのか？」

「だ、だからなんの話？！」

「今さら言い訳などするなよカケリ。お前約束したじゃないか。」

言つ事聞くつて

「……はーーー？ だから、なんの」

「文句なんて言える立場じゃないでしょ。あんたは負け犬なんだから。そんなあんたをね、区長さんがもうつてくださいぬつてことなによ」

「へ? もううひてなにそれえ――?」

「マギウさん、誤解のないようにもう一度言いますか。私は力ケ
りさんの才能を伸ばしたくお預かりさせていただくという話で」
「ちょっと待て区長！ 才能ってなんだ？ あたしは白痴じやない

「あらやだ自分で負け犬つて言つちやつた、ふふつ」

「… そうか、君は気づいていないのか」
ん？ 今区長にやりつて笑わなかつたか？

なんかぞくつとしたん
だけど、氣のせい？

しかしながら才能つて。おかしいだろ、親もちつた一疑えよ。詐欺だ、これなんとか詐欺つてやつだよ。区長だからつて安心しちゃだめだろー。

しかし、この親、もうだめだ聞く耳なんて持たない。すごい気持ち悪いくらい満面の笑顔なんだもの。一体いくら掴まれたんだーー

「カケリ、観念して、区長さんのもとに行きなれ。どうせ他のいいあてなんてないんだし」

「そうやつ」こんなステキな区長さんがもーうすぐださるなんて、もう断るほうがバカつてもんでしょうが

「おまえのやうな人間が、この世界に来るとは思ってもいなかった」

え、え、ええええ―――？！

笑顔で、満面の笑顔で手を振る守銭奴両親に見送られて、あたしは

「お待ちしておりました。マケンドー様力ケリ様」
区長に連れていかれたのだった。そのままの格好で。

うちの側に止まっていた車のドライバーさんがあたしたちを丁寧な動作で出迎えた。ん？もしやこの人区長の関係者か。と探るまでもなく、隣の区長が紹介してくれた。

「俺の秘書をしている」

「カツと申します。お見知りおきを」

「は、はい。マドウ・カケリです。お世話になります」

カツさん、も若い感じだ。二十代前半ってところかなー。見た目もカッコイイし、それに優しそうなお兄さん。はつ、なに和みかけてるんだあたし！

車に揺られる事約二十分、到着したのは…、なにここ豪邸——？—「力クバヤシ家の別邸だ。今は俺の私宅として使っている。今日からお前はここに住む事になる」

「こんな豪邸に住めるなんて、夢みたい。…じゃなくって、一体あたしはなにをさせられるんですか？！」

いくら区長だからって、この展開は、警戒心抱かないほうがおかしいつづーの。

「マケンドー様、まだお話にはなられて？」

「説明は後でかまわんだろう。先に市長へ報告に行かんとな」

「ちょっと説明しろよっ！」

「すぐに市長のもとに向かう。カツ準備をすませるわ」

「はい、マケンドー様」

「こらつ無視するな！」

「あいにくだが俺は多忙な身でな。一から十までお前の面倒は見られん」

見てくれとか頼んだ覚えもない！

「詳しい説明はあとでしてやる。とりあえず、お前が世話になる者への紹介だけ先に済ませる」

くそあ、なんなんだ？この男。さつきから態度とか口調とか偉そうになつてないか。なつてるよな確実に。

下流家庭生まれには、とんと縁がなかつたはずの、豪邸へとやつてきました。突撃！区長の豪邸訪問！

中に入るとどひつかの高級ホテルばかりの広いロビー。噴水の一いつやいつあってもおかしくないぞ、なにけど。出迎える使用人にも圧倒される。ここはもう一企業だなー。

区長は奥の間へと消えていった。カツさんが使用人の人になにか指示して区長のあとについていった。取り残されたあたしのほうへと、やってきたのは女の子の使用人。

「今日からあなたのお世話をまかされたメイドのヒヨコといいます」

「業務的な物言いがちょっと気になつたけど。

「あ、はい、お世話になりますマドウ・カケリといいます」

「はー、部屋いつひなんで、ついてきてもらえます？」

「は、はい」

やつぱりなんか気になる態度だ。

「はいこよ。とつとと入つたら？」

半日だし、声が低くなつたし、やつぱり感じ悪くない？この人。くつただでさえ、親の勝手でいきなり連れてこられて気分悪いってのに、こんな対応されるとますます気分悪いわ。

「あのですね…」

「あなた調子に乗らないでよ。自分が、マケンドー様に選ばれた特別な女の子だなんて、思い上がってたりしないわよね？勘違いはやめなさいよ！」

いきなり人差し指ビシイッと突きつけられて…？はあ？

「はあ？ だれが調子にのつてなんか」

「いい、いくらマケンドー様が超絶ステキだからといって、勝手に恋するには禁止しているから、このマケンドー様ファンクラブ会長のヒヨコを通してからじやないと…」

…はあ左様ですか…。

「あのそなことより

「そんなことですつて？！ ファンクラブが非公認のものだからつていちゃもんつける気？」この小娘がつ

あんまり年違わなさそうな人に小娘呼ばわりされたぞ。

「だからあたしにとつてはどうでもいいことなんだつて。それよりも、ヒヨコさんでしたつけ？ あたしなんで区長に連れてこられたんですか？」

「は？ アンタ何も知らないで来たわけ？」

「うん。両親にだまされたというか、わけがわからないうちに……」

「……」

「一体、なにをせられるんですか？」ここで働くかされるんですか？」

「……」

「ちょっと、なんで答えないんだー？！」

軽くぶちきれるあたしに対して

「知らないし」

「え、ええつと知らないって？」

聞き返す。

「知らんわ――、お前こそなんなんじや――――？！」
「ぎえ――――」

「私はね、今日ここにマケンドー様が女子を一人連れてくる、その者の面倒を見てやってくれといつ指示しか受けてないのよ。知るわけないわむしろこつちが聞きたいんじやぼけが――――」

この人ちょっと危ない人か……、ああやだ。

「そんなに知りたきや、直接マケンドー様かカツ様にお聞きすればいいんじゃないの？ でもねこれだけは確實に言えるわ。アンタはマケンドー様の恋人にはなれないってね！」

もうなんか、めっちゃ帰りたい。

置する。若草区他二十の区からなる青原市は、この国の西部にある。市とは…国を成す自治都市のことだ。そして市は、多数の区によって成り立っている。国の統治にありながら、市はそれぞれの特色を色濃く持っている。青原市もそうだ。二百年以上も続いているある文化、それは青原市に限定したとしても閉鎖的な文化の一つであったが、その文化は青原市に生きる各区民にとって、生活を左右すると言つても過言ではない、重要な意味を持つ文化だった。

現在の青原市長を務めるロビガシ・ゴン五十三歳は、その文化を深く愛し、推し進めている。白いスーツに、派手な柄の赤地のネクタイ、ちょび髭に、ラメの入った派手に光る蛍光色のメガネ。市長というよりは、まるでメディア映えしそうな文化人といった風貌だ。青原市の形を簡単に説明すると、定型ノートの角っこを丸めたような形になる。小さな湖は北部に点在し、主要な河川は三つあり、その三つは南部の海へと流れ出している。青原市の南部は海に面している。

市の心臓部である青原市庁あおはらじょうは、ほぼ市の中心…、中央東区と中央西区に挟まれる形である。若草区から見れば北東にある。若草区から車で一十分から三十分ほどの距離になる。市庁はどの区にも属さない。市庁内に主要な施設は無い、市庁に並列してドーム型のイベント施設が存在感を抑えることなく立っている。

若草区長マケンジーは、ここ市庁へときた。市長へのあることの報告を兼ねての訪庁だ。

マケンジーを迎える青原市長、市長とマケンジーは古くからのなじみでもあった。

「やあやあ待っていたよマケンジー君。今日はひょっとしたら、嬉しい報告の予感だねえ」

「市長、今日無事手に入れることができました」

「そうか、ずいぶんと自信があるみたいじゃないか、これは期待している」とこう事かな？ だがあと一月ほどで、間に合つんだろうか

？」

「間に合わせます。私は不可能は口にしません、市長」

挑戦的な鋭いマケンジー返してくれる。

「楽しみにしてるよマケンジー君。君の『トピコー戦』に注目しているからね、ホント…今期のレースは最高に盛り上がりほしいものだね」

嬉しそうに市長は笑つた。

マケンジーのもとに連れてこられたカケリは一体どうなつてしまつのか？

マケンジー、そして市長はなにを企むのか？
レースとは一体なんなのか？！

第一話へと続く。

第一話 マケンドー、嫌な奴

若草区長マケンドー先へとつれてこられて一日が経った。その間、あたしのお世話をしてくれたひょうメイドのヒヨコさんが、いろいろと教えてくれた。

マケンドー様のかつじよた伝説について、とか、マケンドー様との右腕カツ様の素晴らしい、あるいは、左腕カツ様の素晴らしいとか…、まあいろいろとこりうか主に区長のマケンドーについてだつた。

ヒヨコさんはよっぽど区長にお熱らしく…たしかにイケメンだけじゃ、どうせちょっとあたしは不信感を抱いてしまっている。まあ悪いのはまづちの守銭奴両親なわけだけど。もつとちゃんとあたしに説明する義務つてあるんじゃない？いきなり連れてこられて、親は金金つて田の色輝かせていたし、…売られたんだあたし間違いなく。なにさせられるんだろう？もしかして、ここで住み込みで働かされるとか？ヒヨコさんみたいなメイドとして？

…それならあたしなんてわざわざ連れてかなくても、他にいい働き手なんていいくらでもいそうなものなのに…やつぱりわからない。ヒヨコさんも知らないってすごい勢いでぶちきれるじ。

…はーーー、なんかもうすいー、疲れてます。

「あのー、区長ってまだ帰つてないんだよね？」

「はあ？何言つてんのあんたバカ？マケンドー様は区長なのよ！すつじよく忙しいに決まっているじゃない！アンタがクソして寝ている間に、どれだけ働かれているか想像もつかないでしうけどね！」

いちいちけんか腰なのが腹立つけど、井とも反論していくてもHP

削られるだけと昨日で十分わかったので、軽く流しつつ返事する。

「ですよねー、区長だし忙しいよねー」

「フン、ガツカリさんのようね。フフフ、アンタ、マケンドー様とラブラブドキドキな同棲ラブコメ展開期待していたんでしようけど、おあいにく様、マケンドー様は超多忙なのよー。ざーんねーんでしたーー」

どうしよう、もうすでにこの人の脳内透けて見えているあたしつてエスパーかつて。このやりとりにも疲れてきたよ、そろそろ区長がカツさん戻つてこないかな？

のタイミングで、あたしを呼ぶ声がした。

「…マケンドー様が帰られたわ！　さあそこのクズっこ、失礼のないうつにお迎えするのよー！」

やつと、先に進めそうだよ…。

あたしを待っていたのは、区長とともにいる、浅黒い肌のいかにもアスリートつて肉体のお兄さんだった。…見た感じ使用人さんにも見えないけど、何者か。訊ねる前にそのお兄さんが爽やかに挨拶してきた。

「やあ君が力ケリ君だね？　僕は君のトレーナーすることになるモリオカだ。モリモリ鍛えような」

キラーンと白い歯光させて爽やかに笑うこのモリオカさんと、はあと握手を交わしながら、あたしは区長へと視線を向ける。

「区長！　一体あたしなにさせられるんだ？　ここで働かされるの？」

「話の前に確かめる事がある。ちよつとついて来い」

「は？　え、ちょっと」

話くらいい、すぐにできる」とじやないのか？

説明もなく区長はついて来いと命令した。くそつ、ちょいと苛立ちながらもあたしはついていくしかなかつた。向かつた先は邸内の中庭…というか軽いグラウンドだ。ちょっとサッカーくらい遊べそうな広さがある。さすが、金持ちの家は違うねー（嫌味たっぷりに）

あたしと区長とトレーナーのモリオカさんがそこに揃つた。：確かめるつて一体、なにを確かめるのだろうか？：なんか嫌な予感しかしない。

「脱げ」

「は？」

なんだ、今この区長なんて言つた？　あたしの耳が聞き違えただけか？

「聞こえなかつたのか？　今すぐ脱げ、その窮屈なものを」

「は、はあ？　な、なんだと、そんなことできるわけ」

真顔でこの男なに言つてくれる？　脱げだと？　裸になれつてこと？
冗談じやない、そんな変態に付き合えるわけがない。くるりと向きを変え、逃げる！

が、そうはいかなかつた。足を引っ掛けられ、その変態男に捕まる。

「ぎや——、いや——だ——はなせ——」

「ちつじたばたするな、大人しくしろ」

「いや——」

靴と靴下が、無惨に脱がされ素足にされた。

「よし、走つてみろ」

「ぐ、うつわ、え？　なに？」

「一度聞きばかりするな、そのまま走れといった。全力で走つてみろ」

「ぎやつ」

バシーンで、区長が地面を木刀で叩いた。お前そんな物騒なものでいたいけな女の子を脅すのか？こいつ、区長どじろじやないぞ、とんでもない男じやないか！？

「うが——」

やけつぱちで走つた後、とんでも野郎とモリオカさんが話し合つていた。どうもタイムを計つていたらしい。

一体、なんの実験？

「ふむ、タイムは悪くないが、鍛えなければ話にならないレベルで

すな

「だろうな……レースまで一月か、それまでにアレを使えるレベルにまで引き上げてくれ」

「ちょっとちょっとなんの話?」

なに勝手にそこの一一人だけで話を進めている。

びゅっと風切る音させて、木刀があたしの足元に向けられる。

「お前はモリオカ氏のトレーニングに励め。音を上げる」とは許さん、いいな」

威圧する目、この男、やっぱり……。わなわなと体が震えてくる。

「なつ何様のつもりだ!」

「マケンドー様だ」

くつ、こいつの本性やつぱり、とんでもない畜生野郎だ。

「反抗的な目だな……無駄な足掻きでしかないぞ。お前には選択の自由などないのでだからな」

それからあたしの地獄の日々が始まった。

早朝から、トレーニングルームでモリオカさんのトレーニングが始まる。筋トレ、走りこみ、呼吸法などなど。まともにスポーツやってこなかつたあたしには、最初から体力がついていかなくて、もう疲労ハンパン。

まあでも、トレはキツイけど、それにはなんとか耐えられた。ただ……、時折様子を見に来るマケンドー。木刀もつて鬼の形相で叱咤をかけるもんだから、たまつたもんじゃない。ストレスだ。そんなこんなで、あたしがここへ連れてこられて一月が経った。

「一体……あたしになにをさせつつもりだ」

「顔を上げろカケリ、明日がお前の晴れ舞台だ」

「へ……?」

「そして俺の晴れ舞台もある」

「だから、なに？」

「レースだ」

「レースウ？」

「レース、ひらひらのほうじやなくて、…あっちの意味の？
ただ俗的な表現で、それがどんなものなのか、ハッキリしない。なんのレースって。晴れ舞台ってなに？」

「今日はゆっくり休めて疲れを癒せ。わかつたな」

背中を向けるマケンドー。待て、ちゃんと説明してから行け！

「ちゃんと説明してよ！なんだレースって？」

「お前は余計な事など考えなくていい。ただ明日は走りぬけばいい
説明になどなつてない。結局、あたしはわからないまま、寝床に向かつた。

その途中で、カツさんがあたしに優しく言つた。

「ご心配はいりません。マケンドー様は、カケリ様を悪いようにはいたしません。この私が保証します」

カツさんはいい人そうだから、あたしも信じたくなつてしまつ。まあこんな状況だし、人を疑つてばかりじゃ居心地悪くてやつてられないよ。わかつたと頷いて「でも説明は絶対にしてもらいますよ。あたしだつて知る権利はあるはずです」

にこりと優しい笑顔でカツさんは頷いてくれた。マケンドーに伝えてくれるだろうか。

「お前は何も考へるな、ただゴールだけを目指せばいい」
区長マケンドーはそう言った。

今あたしは、市庁の敷地内にあるドーム施設の中にいた。
レース、それは…

「お前の足に若草区民の生活がかかっている」

「なんだとー」

市が行つてゐるらしい、公な催し。青原市の伝統らしいのだが。各区が、馬と称する走者によつて、レースを行つてゐるのだと。それつてただのイベントじゃなかつた。レースの勝敗によつて、市の予算分けが決まるらしい。ようするに、上位にいけばいくほど、市から回される予算が増えるものらしい。

それはつまり、若草区の各区の生活にも影響するつてこと?それつて…

あたしの肩、じゃない足にみんなの生活がかかつてることなの?

「氣負うな。考えるなと言つただろう」

「そんなこと聞かされて、考えないわけにいかんだろう」
フレッシャーだ、しかも、これがあたしの、そして若草区長マケンドーのデビュー戦。いやでも緊張するわ。

だからマケンドーは説明をしぶつた?カツさんはマケンドーを信じろと言つた。あたしは…

「走れ、それがお前の仕事だ。他の事に気は回せん。そのために俺がいるのだからな」

レースには走者だけじゃない。コース内には様々なトラップが仕掛けられているらしい。それを解除し、走者をサポートし、導くパートナーとのコンビによつてレースを勝たなきやいけない。

ただ走れと言つた。どうせあたしに選択権なんてない。

靴を脱いで裸足になる。背を向けあつたあたしとマケンドー、それぞの場所へと向かつ。

走者のゲートへと向かつ。そこにはもう一人スタート準備をする人がいた。デカイ男の人だ。いかにも絵にかいたようなマッショマン…、もしやこの人が?

「よつ、アンタがオレの対戦相手か? オレの名はコーン・ジャイアントだ。小湖区代表になる。お互ひデビュー戦になるわけだが、

まあ…アンタみたいな小娘相手とは、オレもついてるな
なんだとそれは、簡単に勝てる相手とバカにしているのか？団体だけがでかくて速く走れるものか。

「おてやわらかにー」

愛想笑いで流して。燃える闘志を抱いてゲートの前につく。
負けられるか、こちとらあの鬼区長の仕打ちに耐えてきたんだ。こんなデカブツに負けられるわけない。

ゲート内の斜め上のスピー・カーからアナウンスが聞こえてくる。

『皆様おまたせしました。本日の第一レース、小湖区と若草区の新人デビュー戦と相成りますー。我らが市長の目に止まるのはどちらの新人か！？ まもなくスタートとなりますー。』

アナウンスのあと、スタートへのカウントダウンが始まる。あたしも、対戦者のコーン・ジャイアントって人もスタートの位置に付く。

『3…2…1、スタート！』

ゲートが開き、同時に駆け出す。ひらけた場所、歓声が降り注ぐ中、ただ己の前の進むべき道をひた走る。

スタートダッシュであたしが有利だつたけど、すぐにジャイアントが横に並んだ。

「！？えつ」

目の前に突如落とし穴が現れる。行く先に黒いブラックホールが、つか止まれない。このまま走るしかない。

ダダダダ…。機械音が鳴り響いて。穴の上を渡れるように橋がかかってた。

『若草トラップ解除成功ーー』

そつか、今のはマケンドーがトラップの解除に成功したんだ。そのままのスピードであたしは橋を駆け渡る。

『続いて小湖もトラップ解除だー』

すぐ後ろから追随してくる音が聞こえてくる。…とそんなことに気が配るより、あたしは田の前のことだけに集中するか。ドーン！

すさまじい音と土煙が上がる。今度のトラップは、地面から伸び上がってきた巨大な壁。確実にぶつかるぞ。それでも、あたしの足はスピードを緩めない。

『若草第一のトラップも解除だー、速い、速いぞ若草ーー』
壁は前方へと音を立てて倒れていく。倒れていくその壁へと駆け上がり、進む。壁を越えたその先は、今度はぬかめり出した地面。
「（マケンドー！）」

心中でアイシの名前を呼んで、あたしは突っ込んだ。あれ、ちょっと、まさか、間に合わない？

『ギリギリセーフ！ 若草第三のトラップも解除だーー。まあ残すことこのトラップも次で最後だ！ このまま若草ぶつちきりで「ゴールするのかー？！』

バシユツバシユツ

上空でなにかが放たれる音がしたけど、そのままあたしは「ゴール」と走る。

『おおっ、見事なタイミングだー！ 若草最後のトラップも難なく解除だー。そして「―――ル！』

ズシャツ

「いつてて。…ふう」

「ゴールと同時に滑り込んでいた。いたた。

やつと、あたしの足止まつた。その数秒後に、自分のゴールと勝利のファンファーレを耳にしたのだった。

「勝つた…」

会場のほうへと振り返ると。コースの途中で網にかかつてじたばたしている「ローン・ジャイアント」がいた。あれか、最後のトラップって…。

『本日の第一レース、デビューに勝利の花を咲かせたのは若草だー

ー』

「よつしゃー」

ん？なんか反射的にガツツポーズとっちゃつてた自分。

「お疲れ様です、カケリ様。見事な走りでした」

走者控え室へと向かう通路でカツさんがあたしを出迎えてくれて、タオルとドリンクを手渡してくれた。

「ありがとうカツさん、…マケンジー区長は…？」

「俺ならこいだ」

カツカツと階段を降りてくる靴音。見上げると降りてきたのはマケンジーだ。どこにいたのかって？　トラップ解除者のみの別室にいたんだろう。そこにある間は外との通信は禁止となるらしいから、カツさんとも連絡がとれないらしい。まあレースの間だけのことだけ。

「よくやったとはこわん。驕る者は眞の勝者にはなれんからな。この程度で満足しても、りつては困る」

この男は、カツさんとは正反対だな。

「今日がスタート地点だ。これから先はよつ高みを田端ひぬ」とこれは、勝利はできると思え

「…なんだその言い方。いたいけな女の子が、若草のために走ったんだぞ？」

「勘違いするな。お前に区長への責任などない。責任は区長である俺がすべて背負う。軽々しく若草のためになど口走るな。責任とは立場ある身でなければ背負う資格はない。

お前はただ、なにも考えずに走ればいい、馬としてな

マケンジー、マケンジー、やつぱつせかいつゝじく嫌な奴だ。

「今日のレース楽しませてもらつたよ、マケンジー君」

市庁内の市長の間にて、市長が声を弾ませる相手は、若草区長マケンジーだった。

笑いながらも、その田の奥には悔りがたい不気味な輝きがあった。
市長が見た田どおりの楽観主義者ではないことはマケンドーもよく知っている。

ハツキリと表に出れないが、互いにピッピッとした氣を放つ。
わずかに田を細めて「ありがとうござます」とマケンドーは答える。

満足などしていない、それは互いにだつた。たかがデビュー戦、籠手試しといったところだ。

「這い上がってみせますよ。市長、市が若草を軽視できぬほど」
頂点をとると、マケンドーは誓つた。

「たいした自信だねマケンドー君。しかし意外であつたよ。君の馬、期待していたんだが、…まさかあの女の子だけなのかい？ 君であればもつといい馬が用意できただろう？」

市長が納得してない要素がそれだった。カケリレベルの馬、それで本当にこの先勝ち進んでいくつもりなのかと。素人目にも、カケリはすごい馬には見えなかつた。

「市長、私の馬はアレだけです。期待はずれとおっしゃるなり、とことんその期待に背いてみせましょう。あの馬で頂点をとることで」
にやり、不敵にマケンドーは笑う。それに応えるように、市長もまたにまると笑つた。

馬が力ケリでなくてはならない理由がマケンドーの中にはあつた。
だが、それを公表する気は彼にはないだろつ。むちうらんの本人であるカケリ自身にも。

第三話 君は、天使君

あたしがここへ連れてこられた理由がわかつた。

それは先日のレースだ。あのレースで走らされる馬として、あたしは連れてこられたのだ。

あの親たちがレースのことを知っていたかどうかは疑わしいが、直前まで本人のあたしにすら隠していた区長マケンドーのことだから、親たちにも伏せていたんだろう。

子供がなにさせられるかと「う」とよりも、あの親たちは金が第一の守銭奴だから…、なんて言つて悲しくなってきたぞあたしや。

「マケンドー様、本日のスケジュールですが」

朝食をとりながらカツさんがマケンドーに今日のスケジュールを伝えていた。どうやらこの後すぐに区議会らしい。あたしも同じ席で朝食をとる。

「力ケリ、最近伸びが悪いと聞いているが、最初のレースに勝つたからといって氣を抜くな」

厳しい眼差しと口調でマケンドーがあたしにそう言つてきた。

トレーナーのモリオカさんから聞いたんだろうか。たしかに伸びの悪さは指摘されたけど、しううがないと思うんだけど。

「それがあたしの限界なんだよ。文句があるならもつといい人材でも探してきたほうが効率いいと思うんだけど」

「言い訳などするな。俺の馬はお前だけだ。他など考へん。だからこそ、絶対にお前にはもつと速い馬になつてもらわねばならないにそれ、理由になつてないだろ。だいたいなんであたしじゃなきやだめなんだ？ もつと他にいい人材いるはずだろ、若草狭しといえど。…学生時代、あたしより足の速い人いっぱいいたし、あたしはスポーツでみんなから注目された事なんてほとんどなかつたし。

心当たりがない。…となると、他になにかさせられるかもってこともあるのかもしない。…マケンドー、コイツが外面だけの鬼畜野郎だってことはもうとっくにわかっているしね。

他にいくあてができたら、とつとこんなところ逃げ出してやりた
いさ。

「くつ」

ムカツクこの男、朝食をほおばりながら、これでもかつて睨みつける。マケンドーも鋭い目でにらみ返してくるからもうバチバチと火花ちつてんじやねーのと言わんばかりの精神バトルが。

「そーですねー。あたしの足には若草の命運がかかってるんですよ
ねー」

「お前は俺の言つたことをまったく理解してないよつだな。とんだ
鶏頭か」

「なんだとーー?！」

「マケンドー様、カケリ様になにかご褒美でも提示されてはどうで
しょうか?」

議会へと向かう途中、カツはマケンドーにそう提案した。カケリがレースに意欲的になるには、なにか理由が必要だろう。お金は両親の元に渡るわけだし、カケリ個人には、利益がほとんどない。…カクバヤシ別邸で食と住での不自由はないのだが。年頃で大人しいタイプとは真逆のカケリが言われるがままに従い続けるほうが、考えづらい。

「そうだな。アイツにもレースを勝ち抜くための目標が必要だな…」

「はいお疲れ。今日のトレーニングは終了だ。明日に備えてゆっくり休むんだぞ」

モリオカさんを見送つて、あたしもトレーニングルームを出る。アモリオカさんは住みこみの人じゃないみたい。若草区に住んでいるみたいだけど。

あと一時間ほどで夕食だな。…一番楽しみのが「はんの時間つて、あたし終つてないか。まあいいや。

「困りますよ、ショーリン坊ちゃん」

「いいじゃん細かいなー。まだこいつるさい人も帰つてないみたいだしさ。今のうちに、見ておきたいんだよね。どこ?どこにいるんだー」

なんか騒がしい声がしているな。…聞いたことない男の子の声だ。お密さんだろうか。まああたしには関係ないけど。

「あ、あれ?」

さつきの声がすぐ近くで聞こえた。目があつた。男の子だ。スポーツ刈りの元気そうな感じの男の子。あの制服は、たしか国立中央大付属の…?

「ねえもしかして君が噂の」

「へ?え?」

明らかにあたしのほうを見ながら近寄つてくる。

「兄上が困つているつていう女の子。君のことだよね?間違いなく「な、ななな」

兄上?て誰のこと、まさか?

「へー、あの堅物の兄上に女の子なんて、想像もつかなかつたけど、そうか、君みたいな子がタイプだつたんだ」
な、なにかすごい誤解してない。

それもとんでもなくいやな誤解を……。

「かわいいね、兄上なんかにはもつたいないよ。おれはショーリンつていうんだ。カクバヤシ家の三男で、中大府中の二年で拳法部の副主将やつてんの。よろしくね。ねえねえ君はなにちゃん?」
なれなれしい、というか人懐っこいこだな。このショーリン君つて。ん?カクバヤシつてことは、アイツの弟?
…でも全然似てないな。

「カケリだよ。マドウ・カケリ。年も若いね」

なんか久々かも、年の近い人から、友好的な態度とられたのって。当たり前だつた事のありがたみをかみしめる今。

「カケリちゃんかー、名前もかわいいね」

見た目から名前までかわいいなんて褒められた事ろくにないんだけど、悪い気はしないなー。終始二口一「顔」だし、褒め殺し、マケンドーとはここまで真逆とは。少しは見習えよマケンドー。

「そんなことないけど、ありがと」

「ねえねえどうか遊びに行かない？ 兄上なんかのところにこしてもさ、つまんないんじゃない？」

あれ？ もしかしてショーリンくんはあたしの味方系？

「ショーリン様、困ります。マケンドー様が戻られるまでこちらでお待ちに」

執事長のカトウさんがショーリン君の態度に困った様子で頼んでいた。

「細かいなーカトウは。おれも力クバヤシの人間なんだし、別邸に自由に出入りしたってかまわないだろう」

「勝手なルールを作るな、ショーリン。ここは現家主は俺だ。俺の許しなくここに立ち入る事は認めていない」

「ゲツ、兄上」

「お帰りなさいませ、マケンドー様」

マケンドーがカツさんと一緒に帰ってきた。マケンドー、弟のショーリン君にも容赦なく厳しい口調なんだ。…というか。

「兄上がどう言おうが、ここは連中がおれを拒否することなんてできないんだからさ。好きにこなせてもらうよ」

「帰れ、そもそも若草区民でもないくせに、凶々しい奴が」

ショーリン君とマケンドーの間にバチバチと火花みたいなのが散つてるように見えるんだけど。

なに？ この二人つて仲悪いの？ とてもよきみが見えないけど。

「ほんと心が狭いよね、兄上はさ。長兄上と違つて」

「お前の相手をしてやるほど俺はヒマじゃない。くだらん用しかな

いのなら帰つてもらう」「う

ドゥオーラを放ちながら威嚇するマケンドーに、ショーリン君はひるむ」)ともなく、挑発的な眼差しで肩をすくめながら後ろ向きにさがる。

「兄上おつかないし、出直すとするか。じゃーね、カケリちゃんまた会おうね」「あつ」

すれ違い様にそういう残して、ショーリン君は素早く正面口へと走つていった。

「ばいばーー」

嵐のように去つていった。

「フン、アイツは出入り禁止にしどけ」

「申し訳ございません、しかしマケンドー様」

カトウさんもなんか困つてゐるみたいだし、責めてやるなよマケンドー。マケンドーもそういうだけで、ショーリン君を絶対に拒めないみたいだし。いろいろあるのかな? カクバヤシ家つてのも。「カケリ、アイツが何を言つてきても耳を貸すなよ

「へ? な、なんですよ?」

「なんでもだ。わかつたな!」

またしても説明なんてなしで、超命令だこの鬼畜区長はつつ。

鼻息荒く部屋へと戻つていくマケンドー。ショーリン君のせいだアイツさらに不機嫌になつたみたいだ。一体どんな関係なんだろ? マケンドーとショーリン君。

「カツさん」

カツさんに訊ねようとしたら、カツさんのほうから話しかけてくれた。あの一人の事について。

「さきほどの方はショーリン様、マケンドー様の六つ違ひの弟君になります」

「兄弟でも全然違うよね。…ショーリン君は普通の人懷っこそうな男の子つて感じだったけど」

普通と自分で言つておきながら、あの制服を思い出す。あの制服は青原隋一のエリート学校。カクバヤシの人間だつて言つし、すつごいお金持ちで頭もよくつて、すんざくエリートつてことだから、あや普通ではないな。

そこは置いといて、中身だよ、人柄的なことね。

「ショーリン様は以前からマケンドー様につつかつてくるといいますか…」

「やっぱり仲悪いんですか？」

そう聞くと、カツさんは困ったように眉根を寄せた。

「ショーリン様は一番上のタイショウ様を尊敬されてまして、だからか、マケンドー様を認めたくないようなんですね」
カクバヤシ・タイショウ…、どつかで聞いたような名前だな。…マケンドーたちのお兄さんってことか、まあ有名人なんだよね。「いつか、ショーリン様の日に、マケンドー様の真のお姿が映ればと私は願っています」

真の姿つて、どうの姿？はもうショーリン君も知ってるみたいだし、どういう意味だろ？

「もちろんカケリ様、貴女にも」

「え？ どうということ？ カツさん。

その日、いつものようにトレーニングルームでモリオカさんの到着を待ちながらストレッチしていた。
モリオカさんはおそいなあ。五分前にそう思つてから、待ち続けて十分が過ぎていた。

トレーニングルームの戸が開く。モリオカさんかと思つたらそうじやなくて、そこに立つのはヒヨコさんだつた。不機嫌な顔をして、例のごとく腰に手を当てながらためいきをつく。

「よかつたわねー。モリオカさん急用で来られなくなつたんだつて

「ええっ そうなの？ それじゃあ今日は

「自主トレつてことらしいわよ。いつも言われたとおりにやつとけ

ですって

おおっそつなかー。モリオカさんなにがあつたのかとわからんない
けど。自主トレとは、嬉しいかも。

「そういうわけだから、さぼるんじゃないわよ!」

ヒロコさんそつうい残して自分の仕事に戻つたみたい。シーンとな
るトレーニングルーム。

自主トレか、…うひひ。

監視の目がない。自由の予感。

トレーニングルームからトイレに行くふりをして周囲を探る。みん
なそれぞれの仕事をしているためか、あたしへの目は向かない。マ
ケンドーも仕事に出かけている時間だし。トレーナーのモリオカさ
んも今日はいない。こんなチャンスめつたにない。そう思つたら自
然と足は、館の外へと向かつていた。

外に出て、道路を歩いていく。河川沿いに出て、河川敷を歩く。懐
かしいなこのあたり、子供の頃からよく遊んだ場所。くるぶしほど
まで伸びた草地の上、裸足でよく走つた。うちの親は何度も言つて
るようだけど守銭奴で、子供にも金をかけない主義だつた。靴なん
てすぐに買い換えなきやいけないじやない、子供の足の成長つて早
いし。きつくなつてボロボロな靴を履くしかなくて。学校行く時は
仕方なかつたけど、学校帰りや遊びふ時は、窮屈な靴を脱いで、ほと
んど裸足で駆け回つていた。そんな経験からか、あたしは靴つても
のが苦手で、裸足で走るのが好きなんだ。

靴を脱いで裸足になる。しゃりつとした草の触感が冷たくて心地良
くて、やつぱりあたしは裸足でいるのが一番自然だ。

レースでも、裸足で走つたけど、といえば…、なんでマケンドー
はあたしに裸足で走らせたんだろう？ あたしが裸足が一番走りやす
いって、親も知らない事なのにな。

そういうば何前になるつけ、あたしがまだ小学生の低学年のころ、
ここで走つていたときに男の子と出会つた事があつたんだつけ。：

あまりに昔過ぎて、どんな人だったとか、なにを話したのかはもうさっぱり覚えていなけれど。今どこでなにをしてるんだろうなー。

「この若草のビニカド、暮らしてこねただれつか。

「あれが初恋だったりしたのかなー？」
中学生ぐらいだったか、当時のあたしからしたらずいぶんなお兄さんだつたわけで、あでもさっぱり忘れているあたり怪しいのだけどね。だけど、嬉しかった気持ちがあつたように思うんだ。

『君の走っている姿に』

あ、ワンフレーズだけ思い出した。でも肝心のところが霞がかつた
ミミズ。ミミズ、ミミズ。

遠い昔のキレイな悪い日に浸つていてるだけじゃ生きていけない。

遠い昔のサレインが思ひ出は漫遊しているだけじゃ生きていけない

『お前は馬だ。馬としてレースに出て勝ち続ける』

マケンジーの声の幻聴か。

草を蹴って走る。マケントーめ！ あたしはあたしはなんなんだ

アイツのためでも若草のためでもない。あたしは、なんのために走

ନେତ୍ରା?

擦り切れた元々を蘇りやり再生しているみたいに
二重の映象。遠い日の記憶。君は今、三ヶ月の、
ときれときれ

『君の走つている姿に

同じところを何度も繰り返して、進まなくて。

景色は次々に流れながら、変れていくのは、

「ひがひ」

びっくりして、転倒しそうになりながら失速する。

「あぶない」

すぐ横から聞こえてきたその声の主に、抱きとめられてあたしは転倒を免れる。なにがあつたかっていうと、それは…あああつてちょっと待つて、あたしも現状把握に少し時間が必要なんだ。

だつて、だつて、夢見たいな現実が今日の前に起こつて。あたしを抱きとめてくれたのは、キラキラ輝く絵に描いたような美少年なんだもの。

「ふう、あふなかった……たしいしょ、ふ？」
「ふわっ」

驚いたのは、誰かが併走しているのに気がついて、それからとんでもなく美少年だということに気づいてしまったからで。その美少年に抱きとめられて、見つめられて、こんな状況で平常心保てるほどあたしはクールじゃない！

心配そうに覗き込む瞳を、安心させたくてついやう言つたけれど、あの表情をもう少し見ていたかつたなんて気持ちもあつたり。

二十九

一変嬉しそうな、これまたびきりのエンドレスマイル！ キラ
キラ効果割り増しだよ。なにこの美少年はつ。あたしは百回くら
い萌え殺されたよたつた今。

驚いた。気がついたら隣走っていたから…」

「『じめんね、驚かせて。でも我慢できなかつたんだ。すゞく気持ちよさやうに走つていたから、一緒に走りたくなつたんだ』

「よかつた、ずっと、会いたいと思つていたから」

「え？ 今なんて、どうして？」

「うううああああああ——」

土井の上のほうから響いてくる怒号は、見上げると鬼の形相のヒヨコさんだった、やべえ見つかった。

「ヒヨコさんが来る前に、彼に聞きたいことが。

「あ、あの、どうこうこと、それより君は…」

「そろそろ戻らなきや、じゃあまた、ね。カケリ」

「…く？」

くると背を向けて、エングジエルスマイルの美少年は風のよけに駆けて行つた。

「ま、またねつて…また会えるのかな？」

アレ、それよりあたしの名前、たしかにカケリって呼んだ。…どこかで会つたことあるつけ？…あるわけないか、あんな美少年忘れるわけないし。一体、彼は何者なんだろう。天使のような笑顔の男の子、天使君…。

「カケリ話がある。食事がすんだら一階の処務室に来い」

その日の夜マケンドーに呼び出された。な、なんだろ？、説教フлагаか、そんな予感しかしてこない。

モリオカさんがいなかつたからつて、勝手に出かけたことを咎められるんだろうか。すでにヒヨコさんたちに叱られたけど。

「はあーーー

重い溜息をつきながら、マケンドーが待つ部屋の戸を叩く。

「入れ」

無愛想なマケンドーの声がして、部屋の中へと入つた。

椅子に腰掛けたマケンドーと向かい合つ。デスクの上にはなにか書類があつて、マケンドーがそれを手にする。

「あ、あのーー

言い訳を考えていたあたしの声を、マケンドーの声が搔き消す。書類をぱしつと軽くはたきながら、あたしのほうへ突き出す。

「カケリ、お前と俺で個人的な契約を交わそう

「…く？」

怒鳴られると思い込んでいたあたしの予想を、裏切られた。ん？なんの話なんだろうか？

目をしばたかせるあたしの前に、もう一度マケンドーが書類をパシツとはたいて突き出す。ジロツとこちらむので、めんどくさいもあたしはそれを受け取る。

「なにこれは」

上のほうにだけ軽く目を通して、あたしはデスクの前に腰掛けたままのマケンドーこと視線をやる。

「お前に走るために目標を『え』でやろうと言つていろ」

「え？ どういうこと」

「お前がレースで勝ち続けるためのモチベーションが必要だらう。カケリ、お前はお前の目的のために走ればいい」

あたしのために走れだと？

「お前の望みたつた一つだけ叶えてやろう。ただし、今期のレースで優勝することが条件だ。

お前の望みはなんだ？ カケリ、言つてみろ」

あたしの望みだと？ 本気なのか？ 本気であたしの望みを叶えてくれるつていうの？ このドミまつしぐらなマケンドーが？

「あたしの望みは…、自由になることだ」

くしゃつ、つい力の入った手で書類を握りつぶしてしまつた。にやり、とマケンドーが不気味に笑う。

「わかった、受けてやろうその望み。お前はレースで走り優勝する。それを達成できれば、カケリ、お前を自由の身にしてやろう。それが俺とお前の個人的な契約だ」

「本当？ 絶対だからね！」

二回目のレースが始まる。

通路をまっすぐに進めば、走者用のゲートに向かう。途中階段の前

で、マケンドーと別れる。

「カケリ、お前はお前のために走れ。それ以外のことは考へるな。ただ走ることに集中しろ、トラップは俺がすべて片付けてやる。いけ！」

階段を登つていくマケンドー、あたしはそのまま通路を進む。そして、一回目のレースに挑む。

今回の対戦相手は、二十代後半か三十代ぐらいの、ひょろっとした浅黒い肌のやや出っ歯の男。向こうから先に声をかけてきた。

「よつ、オレが丸谷区の代表、キキタつてんだ、よろしくなお嬢ちゃん」

「若草代表マドウ・カケリです。よろしくお願ひします、負けませんけど」

「言つねー、こつちも女の子だから手は抜かないぜ、まあ負けても恨んだりするなよ」

もうすぐ、あのゲートが開く。その合図となるアナウンスが、スピード一から流れてくる。

『皆様お待たせしました。本日の第一レースは、丸谷区と若草区と相成ります。デビュー戦を見事勝利で飾つた若きエース若草区の活躍にご注目くださいませー。さあ、まもなくスタートとなります』

カウントダウンが始まる。

ゲートが開いて、眩い世界が映ると同時にスタートだ。

「お疲れ様です、カケリ様。見事な走りでした」

「ありがとうカツさん」

レースも無事勝利で終了した。会場は、次のレースで盛り上がりしているけど、あたしたちの戦いはひとまず終了だ。今回のレースも前回のようなトラップが次々に現れたけど、走りを乱されることなく、あたしは裸足で、全力で駆けられた。マケンドーのトラップの解除

は手際よく、一度もトラップにひつかかるよつた事はなかつた。

「慢心するなよ。カケリ、帰つたらすぐにトレーニングの続きだ」
厳しい顔と口調でそう言つマケンジー。別にねぎらいの言葉をかけてくれなんて言わなけども。冷たい奴だよ、マケンジーは、ソレに比べてあの人は…。

河川沿いで出会つた、まるで天使みたいな男の子、天使君。彼のことが脳内に浮かんだ。

第四話　「」が、必要とされる場所

『カケリ、カケリ、やつと会えた』

その声は、キラキラオーラは、君はあの時の、天使君？！
『ずっと会いたかった。カケリ、君はボクの運命の人だよ』

えええうううそ、そんな夢みたいなこと言つてくれるなんて、えつ
ええつちよつ、近いよ天使君？

いやーーきやーーー、そんな抱きしめるなんて、やだもう反則、や
だもう幸せすぎて死ねる。

やだなにこれ、あたしつてば、なんかの少女漫画のヒロインだった
りするわけ？いや、こんな夢みたいなことあつていいの、あつてい
いんだよ…

『好きだよ、…カケリ』

え、ちよつ、やつマジ？顔近いよ天使君、やつややや…

「ん―――」

「とつとと起きんか」「ああああああああああ…」

「あでつ」

バコーン

おでこに衝撃を受けて、あたしはどうを押される。あたしを見下ろ
すのは、週刊誌をくるりと丸めて手に持つ、鬼形相のヒヨコさん…

…。

「いつたーい、もつちよつとふつーに起じしてよ」

「んだと？　たく気持ち悪い寝言あーーんど気持ち悪い寝顔見せた
バツよ。そつちこねふつーに寝てなさこよ…」

はーーー、夢…か。夢と思えば納得してしまうの悲しいのだけど、
抱きしめられてもぬくもりなんてなかつたし、実感しているのはお
でこの痛みくらいだ。ヒヨコさんに打たれたところの。

「つーか天使の夢とか見てたわけ？　マジキモイんですねけど。ちよ

——キモイんじゅー」「うああああ

「朝からそんなにキレないでよ、まつたく。あ、といひでそれ、なんの本?」

あたしはヒヨコさんの手の週刊誌を指差した。あんなもの丸めて武器にするなつづーの。本は叩く物じゃなくて読むものでしょーが。「フン、くつだらない三流ゴシップ誌よ。どこの有名人だろうが結婚しようが熱愛しようが離婚しようが興味ないんじゅー」「うああああーーー、あ離婚はさまあつて感じで悪くはないけどね」

文句言うつてことはけやつかりと中身読んでるんじゅないの?

「だいたいなんで、どこのマスゴミも私とマケンドー様のロマンスをスクープせんのんじゅー、『ロミクズどもがーー』

バシツ

「あでっ、ちょっとなんで人の顔に本投げつけるのよー・痛いでしょーが」

「アンタも気になるようだし見ておいたらいいんじゅないの?どんだけ目を皿にしても、アンタとマケンドー様の熱愛スクープなんてどこにもないですからーー、ゼーんねーんでしたーー」

「つたぐ」

ヒヨコさんのあのキャラにもすっかり慣れている自分が憎いわ。人に週刊誌投げつけて、とつとと自分の持ち場へと戻つていった。にしても、こういう週刊誌も毎週ネタかかさないな。そう毎度都合よく、熱愛だの離婚だのないだろうに。あ、このトップ記事は、先日テレビで騒がれていた連続強盗事件の容疑者だつけ。学生時代だのなんだの、こんなことまで書かれているのか。まあ悪い奴は自業自得とも言えるけど。

なにげなしにパラパラとめくつていたあたしは、ある記事に目が留まった。写真の女人、どこかで見たことあるような気がするけど、よく思い出せない、そんなレベルの有名人…、いや正しくはかつての有名人の記事だった。あの人は今?的なもので、すぐにあたしはページを閉じた。

「ほんとくだらない本だね、ヒヨコさんじやないけど
わい、『』飯食べて、トレー一ーングに向かわなくちゃ。」

「カケリ様おはよつ、」さこます。？額どうかされましたか？」
カツさんに言われてあたしはおでこを擦る。まだちょっと赤みがさ
している。ヒヨコさんがすさまじい形相で睨んできたので、「なん
でもないです。寝相悪かったのかなー？」と誤魔化した。
食堂に入るとすでにマケンジーが朝食をとっていた。

「カケリ」

いきなりマケンジーに呼ばれて、あたしはなぜかぎくりとなる。い
ちいち強めな口調で人を呼ぶなよ。威圧かこら。

「おはよつマケンジー、なに？」

「カケリ様、とりあえずお席に」

「あ、ありがとうございます」

カツさんに席に座るように勧められて、まずはテーブルにとづく。
チラリとまたマケンジーへと視線を向けると、朝から厳しい眼差し
をあたしに向けていた。だからなに？トレー一ーングもむやんとやっ
てるよ。

「お前、あれからアイツと連絡などひとりしてないだろ？」

「へ、え？」

「アイツって、だれ？ まさか、まつさきに浮かんだ顔はあの人だ、
天使君…。天使君のことマケンジーにばれていた？ ヒヨコさんは
天使君のことちゃんと見てなかつたみたいだし、知ってるわけない
よ、うん。」

「アイツ…シヨーリンとは関わるな。アイツに誘われてもついてい
つたりするな」

「ん、へ？」

「シヨーリン君のことだったの？」

「なんのことだと思つたんだ？」

「あ、ついで別に、て、なんでそんなことまで決められなきゃいけないのよ。ショーリン君悪い人とは思えないけど」

「俺はアイツのことだけを言つてるわけじゃない。カケリ、俺との契約を忘れたのか?」

「え、契約つてどういづこと?」

ギロン、とさらにマケンドーの田に殺氣的なものが入ったので、あたしあびくりとなる。け、契約つてもしかして、先日の…、あたしとマケンドーの個人間での契約のことだらうか。

「約束したはずだ、条件を満たすまでは、お前の行動は制限されると。外部の者との接触も禁止していると」

「は? なにそれ、そんな話は聞いてない!」

「なに? 契約書にちゃんと田を通さなかつたのか」

「う…きくり。

いくらなんでも厳しそうやしないか、外部との交流も禁止だなんて、それじゃあ。

「それじゃあ友達と会つたり、話したりするのもダメつてこと」

「当然だ。今さらダダをこねるなどしてもムダだからな。お前は契約書にサインをしたんだ。きちんと田を通さなかつたお前に落ち度があるのだからな」

「く、なんだと、そこまで自由がないのか? あたしは。

「俺の馬でいる間はお前は公人だ。勝手な振る舞いをされて、若草に不利益をもたらされては困るからな。それに、外部からは悪意ある者に狙われる可能性もないことは言えんからな。一人で出歩くのも原則禁止だ。破るなよ」

悪意つて、そりやアンタに対して悪意抱いている人間ならいそなう気もしますけど。

「ん? でもショーリン君は外部じゃないんじゃ? 同じ家の弟なのに?」

「アイツは若草の人間ではない、よつて部外者だ」

そういうくくりなんだ。というか、単にマケンドーが感情でもって

ショーリン君を入れたがらないようと思えるんだけど。

「非レース時でも気を抜くな。いつどこで見られているかわからんからな。カケリ、お前には少々緊迫感が足らんようだし、俺が時間のある時にでも、稽古をつけてやるうか？」

やだなにこの男朝飯食いながら木刀握るの？ ヤンキーなの？ へンタイなの？

全力でお断りしたいわ、嫌な予感しかしない。

「モリオカさんのほうがいいです」

やつぱりと言つてやつた、さわやかスマイル意識して。

「今日のトレーニングはこれで終了だ、お疲れ様」

「今日もありがとうございました。モリオカさんお疲れ様です」「はー、やつぱモリオカさんだわ。トレーナーがもしマケンドーだったら、木刀振り回す鬼畜トレーナーなんだろうな、…」冗談じゃないや。

ふーー、疲れた。晩御飯まで部屋で筋肉ほぐしていくかなー。

「あつ、やつほカケリちゃん、待つてたんだ」

ロビーの階段のてすりにもたれながら、あたしゃと声をかけてきた男の子は。

「ショーリン君、なに？ あたしに用？」

にこにこ顔でショーリン君が近づく。そういうやこないだ怒られていたけど、…いいのかなショーリン君ここに入つたりして。

「うん、今なら兄上いない時間帯だし、カケリちゃんに会つなら今かなと思つたんだ。ねえ、カケリちゃん、遊びに行かない？」

「今から？ いやでも、マケンドーに怒られるんじや」

渋るあたしに、ショーリン君は「ええーー」と残念そうな表情で抗議する。

「酷いなあ兄上、もしかして勝手に出歩くなつて言われてる？」

「まあしきくそのとおりだよー。勝手に出るなとか、友達とも連絡取つたり会つたりしちゃダメだつて」

「酷い、あんまりだ」

ショーリン君、あたしの現状に怒りてくれてる。せっぱぱつマケンド

ーよりも、ショーリン君のほうがあたしの良き理解者なかも。

「そんなの守る必要なんてないよ、行こひ」

「えつ?」

ガツと強引に手を掴まれて引かれて、ショーリン君に連れられるま
またしさ邸外へと出た。い、いいのかなあー…、親切にしてくれ
るカツちゃんの顔を思い出すと心がちくくりと痛む。でも同時にマケン
ドーの顔も思い出したら、ムカツときてショーリン君のほうに行く
べきって考えになつたやつ。

「今からだといじが開いてるかなー。あ、カケリちゃんどじか希望
ある? 映画見たいとかなんでも言つて」

あたしの前を歩いていたショーリン君がくるつと振り返つて尋ねて
きた。今商店街近くの裏道を歩いている。

「うーん、急に言われてもでてこないなー。…いよいショーリン君
に任せると」

「え? いいの? あれの好きなところ。じゃあさ、カケリちゃん
パラダイスとか興味ある? 若草B級観光スポットめぐりとかいつ
ちゃう?」

「えなにそれおもしろいわう

「じゃ決まりつと。兄上だつたら絶対にそんなとこ連れて行つてくれたりしないだろうね。というか、どこかに遊びに連れて行つてくれたりなんてないんだろうな、カケリちゃんかわいそひ」
またしかに、マケンドーに連れて行つてもらつたところなんて、
…レースくらいだ…。

「クソつまんないでしょ、兄上。カケリちゃんを、兄上のところから

出たほうがいいんじゃない。兄上の所にいたつて幸せになんてなれ

ショーリン君、なんでそこまでマケンドーの？…。

「なんでショーリン君マケンジーのことが今まで嫌ってるの？
しかし、鬼畜で嫌な奴だけど、…一応兄弟なんだしょ？」

ぴたり！。一瞬ショーリン君の顔から表情が消える。シーンと静まる空気が、ちょっと怖い？

「カケリちゃんは兄上の事だ」まで知ってる?」

鬼畜なトロのぐせは、外面だけによくて、一にも二にも若草のうてばかりで、区長で…。ああそういうやあんまり知らないかも。アイツの本性だってあたしじだけじゃなくて、カツさんやショーリン君だって知ってるわけだし。…別にアイツのこと深く知りたいなんて思わないけど…思わないけど。

でも、気にならないってことはない。ショーリン君との関係、ちょっと気になるかも。この一人、結構ていうか相当仲悪そなんだもの。なにかあつたとしか思えない。

「お兄ちゃんがこれまで話されにないか
き」と兄一自身も泣き声で云う。

ハツと息を吐きながらそう言つショーリン君の表情は冷たげだ。まるで嘲るような顔に声。「ここまでショーリン君に嫌われるなんて、マケンジーの過去になにがあつたというのだろう。

別に、アイツに興味なんてないけど。

「今ではみんなに偉そうにしてる」「どうせ兄上にはガクノヤシの出来損ない、恥すべき存在なのさ」

その時、黒い風が吹いた。黒い…影?—

あたしがそれに気づくより数秒早くショーリン君が反応した。

「おれの背後をどううなんて、百万年早い！！」「ぐうつ

どすつという音と共に黒服の怪しげな男が崩れ落ちる。突然ショーリン君を背後から襲おうとした謎の男は、襲い掛かる前にショーリ

ン痴の素早い拳に落とされた。あわやか！

「すごい、ショーリン君！ てなにその人」

「見た見た？ おれ実戦でも強いんだよ。まあどこのだれかは、調べればすぐにわかるつしょ。それよりカケリちゃんが無事でなによりだよ」

得意げにパンパンと拳をたたきながらショーリン君があたしのほうへと振り返る。

「！？ ショーリン君まだ他にも」

いる、危険な影が。あたしが察知したより早く…、ショーリン君今一度は今まで油断しきっていたからなのか、うつん、もしそうじゃなくても、一度に三人に襲われたら、反応も追いつかないよ。

「アベノ」

「ショーリン君！？」
「うー！」

倒れこむショーリン君に伸ばした手は届かなくて、急に視界が遮られて、え、真暗や、なにこれ、目隠し？！

ショーリン君がやられた直後にあたしは背後から襲われた。目隠しされて拘束されて、担がれて、車のシートに下ろされて、え、ええつこれつて、これつて…。

「ナニ、玉丸」

車が発進する音に感覚、何も見えなくて、しゃべることもできなくて、ヤバイ、意識が…遠ざかっていく。

あたし、
拉致されたのか。

目隠しを外されて、やつと視界が明るくなつたのは、どつかの部屋の中に連れて来られてからだ。

『日本』

どいいへと見渡す。なんて広い部屋、マケンドーのところに負けず劣

らず、裕福そうな部屋だ。テーブルから本棚やカーテン、インテリアや照明から様々なものが、そういう雰囲気を醸し出している。

「悪いが君にはしばりく」にこにこてもらひ

「は？　え、だれ？」

部屋の外、ドアのすぐ向こうから中年男らしい低い声がした。だ、誰の声かわからない、知らない人だ。

「ここはいつたいど」ですか？　あなただれ？　あたしになにをする気？」

ドアをドンドン叩いてあたしは叫んだ。だめだ、鍵が向こうからかけられている。この部屋に監禁されている？
どうして、どうこと？　なんであたし拉致されて、監禁されているの？　なんなの今の声のおっさんは。

「いきなりの事で混乱しているだろうが、落ち着きたまえ。君に危害は加えたりしない。大人しくしていれば、ちゃんと帰してあげるつもりだ。そう、一日間、ここにいてくれればいいだけだ。もちろん食事は一日二食用意するし、室内には必要最低限のものも揃えてある」

「一体、なんのつもりでこんなことを。…一日間ここにいるって？」

「一日間…、て、明日はレースの日じゃないか。

「ちょっと待つて、困るんだけど！　こっちにだって都合つてものがあるんだけど！　明日は大事な用事が」

「若草区代表の馬」

！？

まさか、この人はあたしが若草代表の馬と知つて。ところによつては、やつぱりレースの関係者？！

「明日のレース、君には不参加でいてもらひ」

「ちよつちよつと、なによそれ、なんのよアンタ」

ドンドンガチャガチャ、ドアは固く閉ざされて、あたしの力では開けることができない。遠ざかる靴の音、あたしに話しかけたこの家の関係者と思われるおっさんはあたしの前から遠ざかつていった。

はあ、仕方ない、部屋の中を探つてみるか。なにかわかるかもしないし。外と連絡が取れそうなもの、電話とかはなかつた。一人で過ごすにはあまりに広すぎる豪華な部屋に、あたしは監禁されてしまつた。

「本当なの？ 若草の馬を捕らえたって」

カケリを捕らえたこの家の主である男に、女は訊ねた。
歳は二十代前半に当たる彼女は、髪を一つに結わえ、黒色のショートドレス風のトレーニングウェアを身に纏つてゐる。この家の主であり、自分の主人でもある男を、強い眼差しでキツと見据えながら問いかけた。

「ああ間違いなく捕まえてきた。ウミコよ、これでお前も安心できるな。明日のレースは不戦勝だ」

「そんな、…私はレースで必ず勝つわ、こんなことしなくて」「勝つと言つて先日負けたばかりではないか。新人とはいえ負けなしの勢いのある若草とは、勝負は避けるのが吉だ。安心しろ、その次のレースでは走らせてやる」

「（臆病者…）」

誰にも聞こえない声量で、ウミコはつぶやいた。ぎゅっと悔しそうに口を結びながら、さり行く主の背を睨みつけた。

彼女ササオ・ウミコは元々表の世界で輝けた人材だった。十代の学生だった頃には陸上部に所属し、数々の大会で輝かしい成績を収めてきた。その舞台はいずれ世界へと、確実に世界へと向かう流れだつた。当時はマスクミも彼女をスターのように取扱つた。世界大会選考会を前にして、彼女は悲劇にまみえた。交通事故に巻き込まれ、足を負傷した。当然世界大会は諦めざるを得なかつた。それだけでも、選手としての道も困難を極めた。リハビリに励んだが、かつてのよう走ることもできなくなり、成績もがた落ちした。あんな

に持ち上げたマスクミも、すっかりと彼女のこととは取り上げなくな
り、彼女に代わる新たなスターを持ち上げた。世間もまた彼女を忘
れ、新しいものへと興味を引かれた。

足の怪我は選手としては終つてしまつたが、日常生活には差し支え
ないほどに回復した。年月は過ぎ、周囲は心配して、彼女に新たな
人生の道を生きよと勧めた。

「わかつてゐる、それでも、私は…」

諦められない気持ち、あの頃のように走りたい。走り抜けたその先
での、拍手喝さい。あそここそが、自分を認められ、自分として輝
ける唯一の場所だった。過去への栄光の未練、それだけではなくて、
それは彼女そのものといつていゝものだつた。

もう一度、走りたい。その想いをどうしても諦められず、リハビリ
トレーニングは欠かさず続けた。

努力のかいあつて、ウミコは走れるようになつた。だが、かつての
記録には届く事はなかつた。世間も、見向きもしてくれなかつた。
もうすでに、ウミコに代わる、いや今では当時のウミコ以上に持ち
上げられている新たなスターがいた。帰る場所などもうなかつた。
それでもウミコは諦めなかつた。走ることしか自分にはないといつ、
思い込みと執念。そしてウミコは知り合ひのつてから青原市のレー
スの話を知る事になつた。ウミコは自らレースの世界へと飛び込ん
だ。緑丘区の区長リンドウのもとへ自分を売り込んだ。こうして緑
丘の馬となり、ウミコはレースに出た。初めてのレースで、華々し
く勝利し、かつて世間を魅了したスターウミコの片鱗を示したのだ。

先日デビュー戦を勝利で飾り、今だ負けなしという新人区長と無名
の馬という若草区をリンドウは警戒していた。彼らのレースを観戦
していたウミコにも、若草の驚異に不安を覚えたのは事実だ。ウミ
コ以上にリンドウのほうが彼らを警戒しているようだ。かつて世界
やプロを目指せた実力者のウミコであつても、それはかつての話だ。

今のウミは全盛期の頃のような強さはないだらう。それでも青原のレースの世界だからこそ、なんとか走つてこられた。だが圧勝などはなく、いつもギリギリだつた。以前ならと歯がゆく思うことはあつたが、過去には戻れない。ギリギリでも勝つしかない。走り続けるために、やつと見つけた自分の居場所を守る為に。それがウミコが馬である理由だつた。

「マケンドー様」

議会が終つた直後、カツがマケンドーのもとへと駆け寄る。カツから話を聞いて、マケンドーの表情が強張り舌打ちをする。

「言つた傍から。すぐにカケリの元へ向かう」
車を発進させ、目的地へと急ぐ。

「ぱりぱりぱり……、この本もちつともおもしろくないし」

テーブルの上にあつたお菓子は勝手に食べてる。いいよね、食べたつて、監禁されてるんだし。いろいろ調べてみたけど、窓やドアすべてに鍵がかかっていた。空調は悪くないけど……そういうことはどうでもよくつて、逃げられそうなところがない。暇つぶしになるようなものも特にない。テレビはおいてないし、本棚にある本は、とてもあたし好みのものはなくて、マンガかゲームくらいおいといてほしいところだよ、気を利かせてさ。

次のレースに出るなつてことは、次の対戦者つてことだよね？ その可能性は高いよね。だいたい犯罪じゃないの？ これつてさ。危害は加えない、後で帰すとは言つていたけど、こんなことする連中なんて信じられるかね。「飯は持つててくれるんだよね？……その時つてチャンスかもしれない。入り口のドアから入るんだろうし、その時を狙えば……。

コンコン

！？ うひつ、びつびつくりした。このタイミングでノックされる

なんて。どきどきする心臓をぎゅっと押さえて深呼吸する。

「な、なに？！」

さつきのおっさんかと思つていたから、声に驚いた。

「警戒しないでくれる。私はあなたを逃がしてあげたいの」

女の人の声だった。

「ほんとにほんとめんなさい。なんとかしてあなたをここから出してあげるわ」

キレイでパキッとした感じの女人だった。そつまつてくれてるってことは、この人はあたしの味方なんだろうか。

「あなたは一体…」

「私も、あなたと同じ馬よ」

馬！？ ということは、どこかの区の代表？

「一体どこの区なんですか？ さつきのおっさんはだれ？」

味方であろうこの人なら、と思つたけど、それには渋い表情で首を横に振られた。

「ほんなんさい、なにも聞かないで。ここでのことも忘れてほしいの」

そんな都合あるか！

「だつてこんなの犯罪」

「わかつて。私だつて許せない。それに、不戦勝だなんて、手を汚して卑怯な事して得た勝利なんて、ガラクタでしかないわ。

酷い事をしているあの男を許せないと思う。だけど、私にはこの道しかなかつた。どうしても、失いたくないの。走りたい、ただそれだけ。

レースこそが、私の失えない居場所なの」

苦しげな顔、なんだろう、あたしこの人をどこかで知つているような気が…。そうじやなくても、この人は悪い人には思えなかつた。

いきなり拉致されて監禁されて、むかついたけど、別に酷いことされたわけじゃないし、お菓子食べちゃつたし。帰してくれるんなら、かまわない。…あ、ことを荒立てないほうが、もしマケンドーにバレたら、…ガクブル、めんどくさいじゃないか。問い合わせたい気持ちがないわけじゃないけど、帰してくれるのない。

「わかりました。なにも聞きません。だからここから帰してくれますよね」

「ええ」

「おいカケリ！」

目の前で止まった車からマケンドーが降りてきた。マケンドーの家へ向かう道路を歩いて帰っているところを、見つかってしまった。
…やば、なんて言い訳しようか。

「無事か？！」

「えつ、あ…」

怒鳴られるかと思っていたら、予想外の第一声に、あたしは一瞬言葉を失う。ん？あれ、てことは、すでにマケンドーは知っていたってこと？ ショーリン君から伝え聞いたのだろうか、ショーリン君は無事なんだろうか。

出会った瞬間、マケンドーの顔は心配気な顔に映つたから、あたしの思考も狂い掛けた。

「あたしなら、無事だけじ、ショーリン君のことは…」

「あいつのことはどうでもいい。俺にとつて大事なのはお前だ」

「えつ…！？」

な、なんでそんなことを。つて一瞬焦つて「ぐわー」つてなる。ああそりゃ、あたしは「イツの馬なんだつた。だから大事なのは、力ケリじやなくて、若草の馬つてことなのよ、間違いなく。

「そうだね、若草の馬だもんね」

「ああ、明日のレースに馬がないのでは話にならんからな。不戦

敗など冗談じやない。ふざけた事をしてくれる、緑丘のコンドウめ

「マケンドーもつ相手のこと調べたの？」

「ええずいぶんと雑なやり方でしたからね。すぐにわかりました。カケリ様が無事戻られて、なによりです」

車からカツさんも降りてきた。

「カケリも無事帰ったし、今回の件、市長に告発してくるか。あの市長は不戦勝はおもしろくないとは言いつつ、なんらかのペナルティは与えてくれるだろう」「うう

「ちょっと待ってマケンドー！」

あたしは慌ててマケンドーを止めた。妙に心にひっかかるのと、やっぱり、なんか後味悪い気がして。どうせなら……。

「どうせなら、明日のレースでこてんぱんにしてやるうじやない」なんて返事が来るかちょっと心配だつたけど、マケンドーはにやりと笑つて「それもそうだな」と頷いてくれた。

レース当日、階段の前でマケンドーと別れて、あたしはスタートゲートへの通路を進む。

「無事レースに出れることを祈つてた

彼女と…今日の対戦相手と向かい合つ。どこかで会つたはずはないけど、昨日会つたばかりだけど、あたしは彼女をどこかで知つている気がしている。

「あたしも、今日のレースに出たかったから」

もしマケンドーがあのまま市長のところに行つてたら、こんな風にこの人にもう一度会えなかつたかもしれない。また会いたいと思つてた。あたしはまだこの人にお礼を言つてなかつたし、名前も知らない。

「私は緑丘区代表ササオ・ウミコよ」

「あたしは若草代表のマドウ・カケリ。あの昨日はありがとうございました」

「いいえこちらこそ、黙つてくれたのよね」

本当はマケンジーたちにばれてしまっているけど。

でも悔しいからこそ、自分たちの土俵で、やふんと言わせてやりたいじゃない。それに、ウミコさんとは、ちやんとした場で会いたかったから。

「緑丘区長、昨日はうちの馬が世話になつたそつで」

マケンジーのそれに、リングウはくつと背中を震わせる。

「私を脅すつもりかね？」

「脅す？ 思い上がらないでいただきたいな。あなたは脅すに値しない存在だ。今日のレースでそれを思い知らせてあげましょ。俺も、俺の馬もこんなところで負けなどしない。このレースでもつてあなたを地べたに這い蹲らせる」

狂言でなく、マケンジーは本氣でそう言つた。自信に満ちた眼差し、自分よりはるかに若いこの男に、リングウは気持ちで押される。力ケリを誘拐し、若草の不戦敗を狙つた時点で、リングウはすでに負けていた。勝負を捨てた者は勝利の女神から見捨てられる。だが、リングウもやすやすと負けてやる心持ちの男ではない。未知数の力ケリには警戒心を抱いているが、自分の馬のウミコもまた、馬としてはけして劣つてはいけない。かつては、世界を狙えた足なのだ。ほつと出の新人にあつさつ負けてやるほど、ウミコも勝負弱くはない。

あたしとウミコさんそれスタートにつく。

例のアナウンスが流れ、スタートゲートが開く。お互い見据える先は同じで、もちろん、ゴールだ。

『お前はお前のために走れ』

マケンジーに言われたとおり、あたしはあたしのために走る。あたしの目的の為に、自由を勝ち取る為に。

マケンジーとリンク、それぞれの席につき、一見「スクワード」に思える形でのそこが彼らの戦場だった。

目の前のモニターに次々と暗号やら問題が表示される。それをキーボードやタッチパネル操作によって解していく。制限内に解ければ該当するトラップは解除される。頭の回転とスピードが要求される。またすぐ上に別のモニターが設置されて、そこには自分の馬である走者が映る。もちろんリアルタイムで表示されている。走者の様子を確認しながら、また素早くしかけを解いていかねばならない。

マケンジーはあまり馬のほうを確認しなかった。チラリと一瞬だけ見るだけで、ほとんど自分の画面に集中していた。

進む先、「コースの下から壁」が競りあがつたり、落下物が進路を塞いだりしたけど、あたしがたどり着く頃には障害は回避されている。壁に穴があいて通れるようになつたり、落下物が散らばつた脇に滑り台が現れて落下物をそちらに流して行つたりして道が開ける。あたしはただ走ればいい。トラップはすべてマケンジーがなんとかしてくれるから。

ウミコさんも速い。すぐ横に並んでいる。わずかな差があるけど、向こうのトラップも順調に解除されていくようだ。だから、ここのあたしとウミコさんのガチンコ勝負だ。

「負けないわ」

「あたしも負けたくない！」

ウミコさんには負けてほしくないと思った。だけど、あたしも負けたくない。でもそれを両方叶える事ってムリだし、それが勝負って

やつなんだし。

駆け抜けた先のゴール、全力を出し切ったあたしたちは、膝をついて肩で息をしていた。

『若草一 勝利ーー』

場内に響くアナウンス、勝つたんだ。

「負けちゃったわ。でも、気持ちよかつた。ありがとうカケリさん」汗を弾かせながら、笑顔でウミコさんはあたしに手を差し出しながらそう言った。

「ひらひらひら、いいレースでした。またウミコさんと走ってみたい」

握手。

「ええ」

あたしはあたしのために走ればいい。

優勝して、自由を勝ち取る為に。だけど、それだけじゃない気がしている。あたしにとつてレースとはなんなのか。

居場所?

あたしがあたしとして、いられる場所、なのかな?

「なにをぽけつとしている、いくぞカケリ」

「つるさいな、わかってるつてば」

余韻もへつたくれもあつたもんじやない。

第五話 感情、それは走るもの

今日は朝早くから、マケンジーと一緒に連れ出された。午前中のトレーニング、今日は中止だつて聞いて、いつたいどこに連れて行かれるのか。車中でマケンジーに訊ねたら……

「俺は初めて行くところだが、お前は好きなんだろ」「は？ だからどこのかつて聞いてるんだけど」

マケンジーハツキリと答えるや。

「カケリ様、ついてからのお楽しみといつ事で」と車を運転しながらカツさんが答えてくれた。

「そうじつことだ」

と偉そうにシートにもたれるマケンジー。

お楽しみってなに？ …怪しい。

「まあ、あれだ。お前もたまこは……」

「へ？ たまこは、なこ？」

「ひ、じゅじゅじゅじゅとひみづくするな、到着するまで大人しく座つてゐ」

ぐいっとマケンジーに乱暴に頭を押さえつけられて、あたしはむき一となる。

「ちょっととなにすんのよ、大人しく座つてるじゃない！」

おどりゅーと反撃とばかりにあたしはパンチを繰り出すが、あつさりとガードされてしまう。むきー。

「言ったそばからその態度とはな、このじゅじゅ馬がつ

「ひ、じゅじゅの鬼畜じゅ馬がつ」

「おー一人とも、車内でじゅれ合つのは大変危険ですので

着いた先、見覚えのある場所だった。

「パラダイス銀河ランド…、ここ？」

星空モチーフのゲートの前で、あたしは後方の一人へと確認するよう振りかえる。

「カケリ様、こちらは初めてですか？」

「つうん、過去に一回ほど遊びに来た事あるけど、……ここなんのようで…」

パラダイス銀河ランド、子供の頃に友達と遊びに来た事はあるのだけど。え？ 親に？ ないない、うちの守銭奴親には。うん、友達の家族とね、一緒に来たつていう。まあつまり遊園地だ。

「なんのようだと？ 遊ぶところではないのか？」

まあたしかに、遊ぶところですけどね、……あ、遊ぶ？

「遊ぶ？ 誰が遊ぶの？！」

ゲート前を歩く人たちがちらちらとこちらを見ている。遊園地を前になにを言つてるんだこいつらつてかんじなんだろ？ でも、疑問じゃない？ マケンドーが遊園地だなんて。

「そこまで説明しないといけないのか」

くつと呻きながらマケンドーが眉間に手で押さえていた。

「わかんないでしょ、ちゃんと説明してもらわないと」

「カケリ様、今日はカケリ様がリフレッシュされるようこそ、マケンドー様のご厚意でこちらにお連れしたのですよ」とカツさん。……え？

「あたしのため？ なんで？」

マケンドーの気遣いとか、なにがあるんじゃないのか？ 怪しそぎる。

「……お前は……そこまで説明しないといけないのか…」

「カケリ様、少しはお察しいただければと…」

「つうん、……いやいやわかんないし」

はーー、とマケンドーが溜息をついて、つまりだなと説明を始める。

「カケリ、お前は若草にとって大事な馬だ。レースに悪影響をもたらせないためにも、精神面にも気を使ってやらんと思ってだな」

「……え？ だからどうこう意図で？」

「先日の件は、約束を守らなかつたお前に落ち度はあるが、俺の監督責任もあるからな」

「先日のつて…、拉致されたこと?」「

来ててくれた時、真っ先に怒られると思つていたから、ちょっと拍子抜けしたんだよね。…あの時のマケンドー、本当に心配そうな顔していたし。…馬であるあたしになにかあつたら困るからだもんね。別に嬉しいなんて思わないし。

「少しでもカケリ様の心のケアになればと、マケンドー様のお心遣い受けてくださいカケリ様」

「あ、あの、別にケアとかって、そりゃいきなり攫われて驚いたけど、全然平氣だし。そんなデリケートなハートの持ち主なら、レースなんてやれてないって」

実際なんてことなかつたし、お菓子もおいしかつたし。閉じ込められてどうなるかって不安はあつたけど、平氣だつたのはウミロさんがあいたからつてのが結構でかいのかもしねえ。

「今日の用つてあたしのためなの? なら余計な気遣いつていうか、あ今から帰つてトレーニングやるし」

「ふ…、たいした馬だなお前は。まあそれでこそ俺の…」

「あ、こんなとこでいつまでも立ち話していたら邪魔になるよ。早く駐車場にもどろ」

「カケリ様、ひょっとして遊園地お好きではないのですか?」「え、いや好きですけど。あまり来た事ないけど、乗り物とか乗るの楽しいし」

「ではせつからくここまで來たのですから、遊んで行つてはどうですか? サア、マケンドー様も」

二コ二コ顔でカツさんはゲートのほうへと促す。あたしはもう帰つてもいいかもつて心境だつたけど、遊園地で遊ぶのは嫌じやないし。でもいいのかな、こういうところ、マケンドーつて苦手なんじや? 「そうだな、そのつもりで來たんだ。…俺は初めてだから見学がらに乗つてみるのもいいだろう。あそこで入場料を払うのだな」

「えつちょつマケンドー？」

なんだあいつノリノリか？ 初めてなの？ 興味心で？
すたすたとあいつはゲート前の受付へと向かっていった。

「いいのかなー」

「今日はじ遠慮なく、楽しんでくださいカケリ様」

あたしたち三人は入場パスポートを購入してゲートを通過する。パラダイス銀河ランド、目をひくドハデなアトラクションはないけど、ジェットコースター や観覧車、メリーゴーランドやゴーカートなどの定番は一通り揃っている。よくも悪くも普通の遊園地だ。特別流行ってはいなけれどまあなんとか廃れず続いている若草唯一の遊園地。子供を連れた家族連れや、若いカップルがちらほりと。乗り物もそんなんに並ばないで乗れる。マケンドーからパスポートを受け取る。

「おおっ 一日乗り放題のゴールドパスーーすっげーー」

くつ貧乏人には高嶺の花のゴールドパスだと？！ よつしや一元をとりまくれるほど乗りまくつてやる！！

「遊園地とは子供の遊ぶところだと思っていたが、意外と大人も多

くいるのだな」

周囲を見渡しながら、マケンドーがつぶやく。そういうこいつ初めてとかさつき言ってなかつたつけ。
まあ力クバヤシのお坊ちゃんがこんな庶民の遊園地になんて遊びに来ることはなかつただろうけどさ。

「へえ、知らないんだマケンドー。たしかに子供向けのアトラクションも多いけど、子供には乗れないものは多いんだよ。特に絶叫系は身長や体重制限もあるし、心臓の弱い人もご遠慮くださいってアナウンスもあるしね」

「ふ、なるほど、あの類は度胸試しといったところか」

とマケンドーが見上げる先は、レールを走るスピード音とそれに混

じる「あやー」といつた悲鳴の声。

一回転のあるジェットコースターだ。あれ前に乗つたことあるナビ、最初はかなり怖かったはず。

マケンドー乗つたことないんだよね？」にやつ。

「そうだ、アレ最初にいこつよ」

にやにやとあたしはジェットコースターを指差す。

「何事も経験だな。いいだりつ」

「悲鳴を上げた人が負けつてことで、くくく、なにかバッゲームでも」

「悲鳴を上げない自信もあるのか？　おもしろい度胸試しなら受けたとつ」

乗ってきたなマケンドー、ジェットコースター初体験の無様な姿を笑つてやるわ！」

「では私はここで待つでありますので、楽しんでくださいませ」

カツさんを残して、あたしとマケンドーはコースターの乗り場へと向かつた。

「なかなかおもしろい乗り物だな、あのジェットコースターといつのは」

「おかえりなさいませ、マケンドー様力ケリ様」

く、マケンドーのやつ悲鳴どころかイキイキとした顔になりやがつて、…つまらん！

「乗り放題ということだし、もう一度乗つてみるか」

嬉々としてまた乗りに行くつもりか、恥ずかしいなはまりやがつて。くつ、なにこの敗北感、別に負けてなんかいんだけど。

「力ケリ様はどうされますか？」

「あー、あたしはちよつトイレに」

「わかりました。」こちらでお待ちしてますので

トイレをすませて外に出たあたしを、意外な声が呼び止めた。

「カケリ！」

マケンドーでもカツさんでもないその声。あれ、聞き覚えがある今
の声ってまさか…？

我が目を疑いたくなる信じられない光景。あたしの目の前にいるのは、天使君だつた。

「え、えつ、なんでここに？」

驚くあたしとは対照的に、天使君はなにが不思議なの？といった表情で

「どうしたの？ カケリ」

「まさかこんなところで会うなんて思わなくて」

「別に不思議な事じやないよ？」

そう言つてあたしの手をとる天使君、それつて…つまり…、いつも
て出会うこととは不思議じやない、あたしたちは運命の相手同士つて
こと？！

天使君にキラキラな瞳でそんなセリフはかれたら、間違いなく惚れ
てしまいまくりでしうがーー！わつきから体の奥からきゅんきゅ
んする音が聞こえてくる気がしてゐ。

こんな偶然だけでも、あたしは幸せすぎて舞い上がりそうなのに、
天使君つてば、さらにあたしを驚かせる行動に出るんだもの。あた
しの手を天使君がとつて、

「いこつカケリ」

なんてキラキラな笑顔で手を引くんだもん。なにこれ、夢なの？あ
の日見た夢が正夢になるの？！のままで行つてしまひた
いよ、もうつづ。

「つて、ちよつどどこに？！」

ドリームしながらも、あたしは慌てる。天使君どこに連れて行くつ
もりなの？ 天使君にだつたらあたしどこでもかまわないけど…む
しろ連れて逃げて！…キャッ

「あれ乗ろ、カケリ」

これまたキラキラスマイルで天使君があたしを誘つたのは、観覧車だつた。か、観覧車つてラブコメでラブイベント発生率激高のスポーツトじやないか——！そんなところにあたしを誘うなんて、これつてまさか、天使君脈あり？てかありまくりだつたりするの？ど、どどどどしそう、両想いなんて経験したことないからわからんないよ——。

両想いなんて都市伝説でしょ？ 両想いなんて宝くじ一等当たるくらいのラッキーな人だけにくるもんでしょ？ いいのか？ あたしなんかが。

乗り場前であつあつしているあたしの顔を、天使君がのぞきこむ。
「カケリ、嫌？」
違う違うむしろ逆一つて主張をあたしは首をぶんぶんか横向に振つて示す。

「よかつた、いじつ」

ひやあああーー、乗っちゃつたよ、あたし天使君と一人つきりでラブコメのイベントスポット観覧車に乗っちゃつたよーなにか起こるフラグ？どきばくはつする。たしけて。

「わー、すーい。一番上につくの楽しみだねカケリ」

向かい合つて座るあたしと天使君。ひえー、ぎりぎり膝が当たりそうな距離、嬉しいけど恥ずかしくて困るよこの距離。

「あ、あの天使君なんでここに？」

きょとんとした顔で天使君が見つめ返してくる。

「テンシ？」

訊ねられてはつとする。あわわ、あたしひてば心中のあだ名で呼んでしまった。天使君つて。きや——！

「い、ごめん勝手なあだ名で呼んだりして。その、以前よく知らなくて……」

「あ、そっか、ボクのこと？ 名前は…アマツカ」

「アマツカ？ アマツカ君って言つんだ」

アマツカアマツカアマツカ…天使君の名前アマツカって言つんだ。アマツカ君…。うわーもう名前だけできゅん死ねる…なんてステキな響きなのアマツカー！」

「アマツカ君は、一人なの？ 誰か連れの人とか…」

遊園地で一人で遊びに来ている人って普通いなうだろうし。もしいても、その人たちほつたらかしてあたしを誘うというのも変な気がするし。

「ううん、いないよ。カケリはだれか待つてたの？」

「あ、ううん、だ、だいじょうぶ、気にしないでいいよ」

カツさん待たせているけど、大丈夫だよね？ トイレが混んでいたとか言い訳すれば。まあ一応園内にいるわけだし。

「よかつた。カケリと、一人きりで話したいって思つていたから

！？！？

なにこの展開、あたしラブコメ的に殺されるんですか！？

どぎやっと勢いよく生えてきたタケノコみたいに、フラグがたつた

？！

『君はボクの運命の人だよ、好きだよ…カケリ』

むきやーー、あの夢のあのシーンあのセリフが今までに脳内再生された。アマツカ君の声で！ヤバイ、ヤバイですよ。ああもうそんなこと言われたら、あたしもう…昇天しちゃうよ。

あああ頭の音うるさい。アマツカ君の声ちゃんと聞きたいんだから、ちょつと血液自重して！

「は、話つてなに？」

うひや、緊張のあまり声が上ずつてるし。

いつ、そんなまっすぐな目で見つめないで、アマツカ君。あたしは、

どきどきのあまり完全に固まってしまう。

「カケリのこと、知りたい」

「……？？え？え？」

「これはもう告白ですか？　あたしのこと知りたいって感情は、それは間違いなくこから始まる一文字のアレですか？！」

「どうしよう、あたしのこと知りたいって、なにから話したらいいんだろう。名前から？　あ、そういえばなんで…」

「そういうば、気になつていたけど、アマツカ君なんであたしの名前知つてたの？　以前どこかで会つたことあった？」

最初に河川敷で会つた時、あれがはじめての接触のはず、なのにアマツカ君はあたしの名前を知つていた。もし会つたことがあるのなら、アマツカ君みたいな美少年を忘れるはずなんてないのに。でも、もし会つていたのなら、覚えていなかつたあたしつですぐ失礼になるじゃない。ちょっとびくつきながら訊ねてみた。

「遠くからだけど、ずっと見てたから、知つてたよカケリのこと。初めて目にしたときから、気になつてた」

そんな真剣な眼差しで「見てた」とか「気になつてた」とか言われるともう、もうきやーーーて脳内でじたばたしちゃつてますが。ああもうアマツカ君つたら！　だめきゅん死ぬ！

「その時から、聞きたかった。カケリの気持ち、知りたくて」そ、そんなあたしの気持ちなんて、決まつてるよアマツカ君！

「あたし、あたしも、あたしの気持ちは」

「カケリ走つているとき、どんな気持ち？」

「あたしの気持ちは、え？　は、走つている…時？」

「こくり、とにかく顔でアマツカ君が頷く。…え、えと、え、ええ？！　なんですか？」

「は、走つて、あ…あのアマツカ君…。あ、ああ！」

ふと斜め下に目線を泳がせた時、バチッと目があつてしまつた。マケンドーとカツさんだ。や、やっぱ。

幸い？にも観覧車はもう地上に近づいていた。あわあわと脳内パー

ツクしながら、あたしは慌てて観覧車を降りた。

「あ、そうだ。アマツカ君、その連絡先聞いてもいい？」

慌てて走り出した足を引きとめて、あたしは大切なことをここで終わりにしたくなくて、振り返りながらアマツカ君に訊ねた。

「また会えるよ、じゃあね、カケリ」

軽く手を振つて、アマツカ君は観覧車から軽やかに降りると、あたしとは反対の方向にと走つていった。

あつという間に姿が見えなくなつて、彼は幻だつたのかなと思つてしまいそうなほど、あつという間に消えてしまった。

まるで、夢のような時間だつたな。

と、いかん、余韻に浸つている場合じやなかつたわ。マケンドーたちが見えたほうへとあたしは走つた。

「ずいぶんと遅いトイレだつたな、カケリ」

う、ちょっとトイレ休憩のつもりが三十分近く経つていた。さすがに、のんびりしすぎだよね。

「いやトイレ混んでて、あつちこつち走つちゃつて」

しらじらしいウソはすぐにばれた。

「とほけるな、のん気に乗り物に乗つていたではないか

「うう、どうしても観覧車に乗りたかったんだよ…」

ほんとはアマツカ君に誘われたからだけど、別にうそじやないし、乗りたかったし観覧車。

「カケリ様、それは別にかまわないのですが、せめてお声をかけてからにしてください。心配してしまいます」

「あう、ごめんなさい」

もううな垂れるしかない。下手な言い訳も通用しないし。素直に謝るしかない。

「…なにかあつたのか？」

ぎく。

「マケンドー、あの時アマツカ君に気づいたんだらうか？ 角度的に距離的に、気づかなかつたとしてもおかしくないけど。別にやましい」となんてなにもないけど、マケンドーとの約束…には違反してしまつわけで。いつそ見切りをつけるならそれでもかまわないけど。「ずいぶんと疲れた顔をしているからな」

「え、あいや、別にそんな疲れているわけじゃ」

「ふい、とマケンドーが時計に目をやる。

「時間はまだあるが、あまりお前を疲れさせむわけにもいかんしな。もう帰るか？」

「そうですね、カケリ様、また口を改めて遊びにいらしてはいかがでしょ？」

「ああ、うん、そうする」

アマツカ君にじきじきしまくつて、疲れた氣がするし。なんだこのエネルギー消費はパないね。

まさかこんなところで会えるなんて、思いもしなかつたけど、また会えるって言つてたし、また会えるよね？ アマツカ君。

帰宅後、議会へと向かうマケンドーが車内でぼやく。

「アイツ、あまり楽しんでなかつたみたいだな…俺は間違つたのか…」

「そんなことはありませんよ。マケンドー様のお心遣い、きっと力ケリ様にも伝わつていらっしゃるはずです」
カツのそれに、マケンドーは同意するでもなく、怪訝な顔で窓の外へと顔を向けた。

「区民の心をわかる前に、アイツ一人の心すらわかつてやれんのはな…」

「こんの腐れ外道があツツッ…！」

「あだつ、ちよつなんでそこまで言われなきゃならつ、あだつ、あ

だだ

ヒヨコさんから理不尽な暴行を受ける。だれかも「この人なんとかして！」

丸めた週刊誌でぽいぽい呪いで、しまこにはおびひやーとそれを投げつけてきた。その理由は「とくに、ええもうお分かりいただけただろう。ようするに嫉妬つてやつだ。あたしがマケンドーに遊園地に連れて行つてもらつたつてことが、心底許せないらしい。ヒヨコさん、もう少し心に余裕を持つてほしいよ。

「まさかと思うけど、まさかありえないはずだけけど、アンタマケンドー様と二人きりで観覧車とか乗つてないでしょうね？ 乗つてたら死刑確定！」

ギリギリと歯軋り音をさせながら、悪魔のよつなオーラを放つヒヨコさん。あたしはマケンドーのことなんてなんとも思つてないのに、何度言つても理解してくれないんだよね、この人。

「別にマケンドーとは…」

観覧車…、乗つたのはアマツカ君と…ふわ、ヤバイ思い出しだけで顔が赤くなるにやける。

「つっ！ 乗つたのね、マケンドー様と、くそがつゝ死にさひせー！」

「！」

「は？ え、ちよつ、違つてばー！ 話を最後まで聞いてーあだだだ

だ

「ふん、今日はこのくらいで勘弁してあげる。でもこれ以上調子に乗つたら、アンタわかつてんでしょうね」

悪の組織の下つ端みたいなキャラだな、ヒヨコさんつて。…まあ周囲の目もあるし、本気の怪我はならないように手加減はしてくれているみたいだけど。てことはまだ理性は働いているみたいだね、あれでも…。

また、こんなところにほおり投げて放置していくし。とあたしはヒ

「ウミコさんが投げつけた週刊誌を拾い上げた。パラパラと自然にめぐれたページに、あたしは目を奪われた。

「！？ これって…」

記事の扱いはさほどじゅなかつたけど、そこに目が留まつたのは写真の人物に見覚えがあつたから。あつ、そういうえばあの時のひつかり。有名人だつたんだ、と言つてもかつてのつて言つたほうがあつてるのか。その写真の人は、先日あたしがレースで対戦した相手…ウミコさんだ。

驚いたのはウミコさんが載つていただけじゃなく、記事の内容。

「なにこれ、酷い…」

かつてトップアスリートだつたウミコさんが、事故のせいで現役を引退。その後の消息が絶たれていたが、今彼女は、といった内容で。青原市の緑丘区にひつそりと移り住み、現緑丘区長の愛人になつてゐるつていう。そんなウミコさんを嘲笑うような内容だつた。レースのことは書かれてなかつたけど、だけど酷い酷すぎる。

怒りが湧きあがつてしまふがなかつた。この腐つた外道な記事書いたのどこのだれよ？！ くつそー今日の前にいたらボコボコにしてやんのにつ！

今田はレースの田だ。場内の控え室が並ぶ通路で、あたしはウミコさんに会つた。

「ウミコさん、こんにちは」

「あ、カケリさんこんにちは、あなたも今田出番だつたのね」

「はい、今日は三番目なん」

「そう、じゃあ私のすぐ後になるのね。お互いベストをつくしましょう」

「はい」

ふふとウミコさんが笑う。やつぱりいい人だな、ウミコさんは。

「ねえ」と言つて、ウミコさんの顔から笑顔が消える。

「今後も警戒は怠らないほうがいいわ。あなたたち若草は注目されているみたいだから。…悪意を持つて近づくのが、リンドウだけではないと思ったほうがいい。悲しいけれどそれが事実」まるで自分の事のように語るウミコさん。！ そうか、自分の事なんだ。あの記事のこと思い出す。ウミコさんは今までそういう経験をしてきたんだ。馬となつたことで、ううん、それ以前に世間から注目を浴びた有名人だつたから。

「あんな記事…、でたらめですよね！ あたしははなから信じませんから！」

数秒ウミコさんは黙り込んだ。あたしの言った事に気づいて「ああ」と返事をする。

「そつか、知つてたのね。私がリンドウの愛人として食いつないでいるとかいう。

ええ、でたらめよ。私とリンドウは主人と馬、それ以上でもそれ以外の関係になつたことがないわ。だけど、捏造なんて簡単にできちゃうものなのよ。奴らは適当な証拠をでっちあげて、記事にする。世間が食いつきそうな素材を選んで、おもしろおかしく調理する」「そんな酷い、でたらめのでつちあげだなんて、そんなことがまかり通つていいいなんて。ウミコさんも反論すればいいのに！ わかつてくれる人はわかってくれるはずだよ」

あたしがために、ウミコさんのことわからうとする人、きっと他にもいるはずだよ。

でたらめな記事を真に受けて、ウミコさんをそう言った目で見る人がいるかもしれないなんて思うと、すこく悔しい。

「悔しくないわけないわ。だけど連中に牙をむいてそれで解決するわけではないし、一度そう言う噂が流れれば、人はどこかでそう言う目で見てしまう。それに私はレースに集中したいから、そんなことにエネルギーを使いたくないのよ。それに…、私をわかってくれている人はちゃんといる。カケリさん、あなたは私の事そんな人間じゃないと信じてくれていいでしょう。十分よ

「ウ//ウセ…」

今日のレースもなんとか勝利した。控え室前の通路で、馬には思えない（ここでは浮いた感じ）の男の人�이て気になつた。関係者？にしては挙動不審で、怪しくて。

「あの、なにやつてるんですか？」

声をかけると、「うわっ」と一瞬驚きの声を上げて、すぐに「いやああはは」と誤魔化すように笑つた。胡散臭い人だなと思つあたしに気づいたのか、怪しい者じゃないとアピールしてきた。

「君、ササオ・ウミウさんのこと知つてる？」

「なんですか？あなた知り合いでですか？」

いきなりウミウさんのこと訊ねてくるなんて、怪しいオーラがビンビンしてくる。もしウ//ウセんのちゃんとした知り合にならこんな訊ね方しないと思つし。

「ああまあ、知り合いでいうか、ちょっととしたね」
はつきりしない言い方がますます胡散臭い。

「そういうや君もレースに出てるんだってね。今話題の鋼鉄の天使も十六歳だって聞くし、君もそれくらい、いやもしかしてもっと若いんじゃないかな。君みたいな子がこんなところにいるなんて、なにか訳ありつてことだよね？」

う、なんだこの人、気持ち悪い、ギョロッとした目です』しまくしたてて迫つてくる。

「なんなの？ ちょっと失礼じや」

「なにしているの？ 帰つて！」

強い声が通路内で響いた。声を発したのは、『むらくと向かつてくるウミウさん。

「やれやれ、レースのことは記事にできないし、田を改めてお伺いしますよ、ウ//ウせん」

にやにやと気持ち悪い笑みを浮かべて男はそそくわと帰つた。わつ

きのウミコさん迫力合ったな、あたしまでびくつとしちゃったよ。

「だいじょうぶ？ 変なこと聞かれなかつた？」

「え、はい…、だれなんですか？ あの人、ウミコさんの知り合い

？」

「まあね、いい意味での知り合いではないけど。某特社っていう出版社の記者よ。その中でもゴシップばかりの雑誌のね」

「え！ まさか、あの雑誌の記事書いた人？！」

ウミコさんの中傷記事を書いたあの記者だつていうの？」

「自分で言うのもなんだけど、私ははちょっととした有名人でね。当時はマスコミにもではやされて、私もそれにのつかつてしまつたのが悪いんだけど。その頃にあの人のインタビューを受けたこともあつたのよ。ずいぶんと目をかけられていたみたいだから、私が落ちぶれたつていうのが気にいらんじやないかしら」

「ウミコさんは落ちぶれてないし、それに、そんな感情であんなこと記事にするなんて、許せないよ！ あたし言つてくる」

「えつ、ちょっとカケリさん？！」

まだ遠くまで行つてないはず。会場出ですぐのところに、さつきの嫌な記者の男がいた。車のほうへと向かう途中らしい。

「ちょっと、待つてよ！」

記者の男が足を止めて、二歩ほど振り向く。

「ああさつきの、なにか？」

「あの記事書いたのあなたなんでしょう？」

「あの記事…、ああ、うちの本見てくれたんだ」

好きで見たわけじゃない、たまたまだまたま。

「取り消してよ！ あんなのでたらめじゃない！ すぐに誌面に謝

罪文でものつけて、あの記事は間違いだつたつてやつてよ

「でたらめだなんて、なんで言い切れるの？」

ところどころ噴きながらつて態度が馬鹿にしててさうにムカツク。

「ウミコさんはでたらめつて言つてたし、あたしもそう感じたからね。ウミコさんがなんで青原に来たのか知つてるの？ 走りたいか

らだよ」

「レースのことは規制がかかっているから、記事にはできないんだよ。正直俺もレースのことにはあんまり興味なくてね、まあ仕事柄「ゴシップをかきつけちゃうわけ、そして読者もまたそういう話題を求めているからね、例えでつちあげの記事だとしても、彼女が区長の愛人ではない可能性はゼロじゃないってこと」

「そんな目でしか人を見られないほうが腐っているよー。あたしはウミコさんを信じる。あの人を陥れるような悪が許されていいわけがない」

「? なにができるとこりのかな? 君みたいな子供に、レースで走ることしかできない馬に。少なくとも、君より俺のほうが地位だってあるわけだし」

また嘲るような笑いを浮かべて、悔しい、ほんとむかつく。感情が走るまま、あたしの手は拳を作っていた。振り上げる、はじける感情のままに、コイツをぶん殴つて

「カケリ!」

振り上げたままあたしの拳は止まつた。アイツの声に引き止められた。

「マケンドー…」

「君の飼い主が現れたよ、大人しく引き返したらどうだい」
むかつく記者男をギッと睨みつける。でもそれにはコイツをびびらせるほどの効力なんてない。勝ち誇った嫌な顔で、あの記者の男は去っていく。

悔しくて、わけわかんなくて、あたしは両頬をぼとぼと熱いもので濡らしていたんだ。

「だいたいのことはササオ・ウミコから聞いた。本人も気にするなと言つていたし、お前が口を挟む問題じゃないだろ? もつ関わるな、お前にどういふことができる」とじやない」

マケンドーはそう言つたが、あたしは腹の虫がおさまらなかつた。

「ウミコさん悔しそうに言つてた。あたしだけでもわかってくれるだけで十分だつて。ずっと我慢しているんだよ。

ウミコさんにおたしは助けられたのに、あたしは助けてあげられないなんて、悔しいよ」

「…わかつた。お前はカツに連れて帰つてもうえ。あの記者には俺が話をつけてこよう」

「！？ え、マケンドー、どうこい？」

「カケリ様、マケンドー様におまかせして、戻りましょう」

カツさんと一緒に、おたしは先に帰宅した。

後日、例のゴシップ誌にはウミコさんに関する記事の謝罪文が載せられた。マケンドーが出版元に上手く掛け合つてくれたらしい。これで少しほうウミコさんが救われてくれるといふとおたしは思つた。この時、マケンドーがどんな心境でいたかなんて、おたしは知りもしなかつた。

第六話 立ちはだかる、鋼鉄の壁

「おおー、すーーー、新鮮だー」

ただ今、あたしはここ青原市のレース会場にきてる。

といつても、今回は馬としてではなく、一観客として。

「おい、なにをきょろきょろしている。早く來い！ カケリ！」
マケンドーがうるさく急かすので「はいはい」と席のほうへと向かう。

あたしとマケンドーとカツさんとで並んで席に着く。
走っている時とはまつたく見えてくる景色が違うな。物珍しくてついきょろきょろしてしまつ。

行つたことはないけど、スポーツの觀戦とさほど変わらない感じかなあ。結構お客さん入ってるんだ。

チケットは青原市民であれば購入できるらしい。…青原市民でなければ、原則不可。入場時に身分証の提示を求められるからね。

観客席に座るのは初めてのことだ。レースには何度か参加しているけれど、見る側ってのは初めて。ふう、楽でいいわ。チケット用意したのもマケンドーだし。

で、なんで今日はレースを觀戦しているのかというと。

「今日は遊びに来たわけじゃない。偵察も兼ねてだな」
そういうのってマケンドーやカツさんの仕事じゃない？ あたしが来ることになにか意味もあるのだろうか。

「中央東区…、前期のチャンピオンが今日出る」

「中央東って、まだ対戦していないところだよね。チャンピオンってことは強いの？」

「…チャンピオンだから、な」

まあたしかに。

「中央東区の馬ですが、毎年変わっていますね。ただ、…変わらな

いのは……」

「カツ、お前のいいたいところは俺も気になつていてる部分だ。中央東の馬の特徴……」

「ん？ あ、そろそろスタートみたいだよ」眉間にしわ寄せているマケンドーたちからあたしはコースへと目を向ける。

『皆様大変長らくお待たせしました！ 本日の第一レース不動のチヤンピオン中央東区、それに挑むは花本区！ 中央東の馬、鋼鉄の天使の独走を花本は止めることができるのか！？ 注目のレースまもなくスタートとなります！』アナウンスが流れ、会場のテンションも上がり観客の声がどころどころで上がる。

「鋼鉄の天使？ なにそれ、なんかのアニメ？」

「マスコミがつけた異名だろう。…よくつけたものだ、一つ前の中央東の馬は…たしか【鋼鉄のカモシカ】だつたな」

「ええたしかにそうでした。鋼鉄シリーズと呼ばれているようですが」

鋼鉄シリーズってなんだ？ シリーズもののアニメみたいな響きか？ て好きだなマスコミはそういう変なあだ名つけるの。王子とか天使だと、こいつぱずかしいだろ、そう呼ばれる本人は。

「鋼鉄って単語にこだわってんのかね？」マスコミは

「いや、マスコミがこだわっているという理由ではないと思うが、まあ見ている、その理由は今にわかる」

「はあ……」

レースが始まる。ファンファーレが鳴つて、観客席のそこかしこでパンパンと爆竹が鳴るような派手な音がして、レースという名の祭りの始まりを伝える。

観客席からは馬が走る「ースが見渡せ、上や下や横から次々とトラップが姿を現す。うん、でも中には隠れているトラップもあるんだよね。あのあたりやあのあたりなんて怪しいな、馬としての勘も含めつつコースを見渡す。それから観客席からは、正面に大きなモニターがあつて、映画を見るような感覚で、あそこに馬たちが走っているところをズームアップして見られるんだろうな。て今モニターの映像が先ほどまで流れていた青草の観光案内や地元ニュースから切り替わって、本日のレース、中央東区と花本区の名が「デカデカ」と表示された。

カウントダウンが始まると、自分が走る時とは違う、ドキドキを感じながら、スタートのあと少しの時を待つ。

『スタート!』

わあっと観客席から湧き上がるような歓声が上がつて盛り上がる。二人の馬が、スタート地点より飛び出す。モニターにグンと馬の姿が映し出される。花本のほうは二十代くらいの男性で、中央東のほうは、女人の人、しかも若い感じ、いやそれ以上に気になつたのは、彼女の足……。

「変わつたブーツ、走りにくくないのかな?」

キラキラに光る金属のような素材に見える膝元まであるブーツで彼女は走つている。走りにくそうな見た目に反して、馬の彼女は表情変わらず華麗に走る。走りにくそうどころか、グングンと加速して、スタートして五秒もたたない間に、対戦者との距離を十メートルは引き離していた。トラップのほうも次々と解除されてく、そのスピードも早い、彼女の走りを止める事がなくらいだ。

「すごい、速い」

『圧倒的ーー! 中央東区鋼鉄の天使、ぶつちぎりのスピードでレースを制しましたー! 王者の独走はどこまで続くのか、こつこつ期待ー!』

二つに結つた長い髪がなびいている。走り終えたチャンピオンの馬は、よく見たらかなり若い女の子だった。

「鋼鉄の天使、あの鋼鉄の義足を指してそう呼ばれている」隣のマケンドーのそれにあたしは「えつ」と声を上げて話した本人のほうへと向く。

「義足って、ブーツじゃないの？あれ、てつきり変わったブーツだと思つてた。義足つてことはブーツでことじやないよね？えどうじうこと？」

「中央東の今期の馬、マスコミが鋼鉄の天使と呼んでいるのがある娘…テンカワ・ワタルだ」

「テンカワ・ワタル…、鋼鉄の天使」

「中央東の馬には共通のシンボルがある、それがあの鋼鉄の足だ」モニターに映るテンカワさんへと目を向ける。その鋼鉄の足、も気になるけど、あたしが気になつたのは表情のほうだ。疲労を感じさせないクールな表情。只者じゃなさそ、走りから、あの独特的の足から、それから崩れない表情。

「ぶつちぎつてたよね、さすがチャンピオン。ていうかさ、ひょつとしてあの鋼鉄の足になにか仕掛けがあるんじゃない？」

見た目からして走りにくそうなんだけど、あのぶつちぎりのスピードは、普通に考へてもあの異様な足に仕掛けがあるような気がする。そこはマケンドーも否定しなかつたけど、渋い表情で。

「かもしれないが、反則では無いからな、義足で走るなどいうルールはない」

「さつきからひつかかつてたんだけど、義足義足つてビうじうこと？」あれって特殊なブーツじゃなくて…」

義足つてのはつまり、自分の足ではなくて…ていう意味の…、え、あれ？

「一見してわかりにくいが、テンカワに足はない」

「……、足はないって、え、じゃあ、あの速さで、えつ…」

「カケリ様、大丈夫ですか？」

ショックで軽く眩暈を起こしたあたしを、隣のカツさんが心配してくれた。「ああうんだけじょうぶ、…ちょっとびっくりしたよ。…

義足で。あんなに走れるなんて、すごいよテンカワさん…」

事実を知つてから、再びモニターに映るテンカワさんを見て、すごく高いところにいる人のように見えた。

なんだか、のどが渴いた…。

「ちょっと、ジュース買ってくる」

「ああ、へんなところに行くなよ」

客席から離れて、あたしは自動販売機の場所へと向かった。ジュース飲むついでにトイレによつて。ここなら若草市民しかいないし、ヘンな連中もいないだろうから、カツさんたちも心配はしないようすだ。あたしもそのほうが気楽でいいしね。オレンジジュースを飲み終えて、客席のほうへと戻るあたしは、意外な人物と遭遇することになる。意外というか、予想外というか、だけども、こうしてまた出会つことは不思議じやなかつた気もするその相手。

「カケリ」

エンジェルボイスがあたしの耳をくすぐる。キラキラオーラに目をしばたかせる。これは夢ではなくて、現実の続きで、たしかに今日の前にいる。夢のような相手。

「アマツカ君！？」

驚くあたしに、アマツカ君は優しいエンジェルスマイルで「そうだよ」と答えてくれた。

先日、遊園地で会つて以来、また会えるつてアマツカ君は言つたけど、「こんなに早く、さらにこんな場所で会えるなんて思つてなかつたから、あたしは慌てふためいてしまつ」

「ぐ、偶然だね、こんなところでまた会えるなんて」

「え、偶然？ そんなことないよ、カケリ」

につこり。とまたアマツカ君つてば、キラキラエンジェルスマイルで微笑むもんだから、あたしの脳内きやーーつて祭り状態になつちやうよ！え、でも偶然じやないつて言い切るなんて、それつてつまり、アマツカ君はこういいたいわけ？「偶然ではなく、運命なのだ

と

なんて都合のよい解釈をして、あたしは頭をげんこでぐりぐりする。

「そつかアマツカ君も地元なんだ…、若草の人？」

それにはアマツカ君は頷かなかつた。若草じやないのかな、…となるとその周辺の区の人かな。よく若草で会つたし。行動範囲は近いのかも。

「ここには、よく来るの？」

話題を変える。こんなところで会うとは思わなかつたけど、ここには青原市民なら入れるわけだし、アマツカ君がいたつておかしくないし。でもよくレースを見に来ているのなら、…あたしが若草の馬だつてもしかして、ばれているのかもしれない。

「ううん、たまたま」

「え、たまたま？」

拍子抜けしたあたしが聞き返す。アマツカ君は「そうだよ」とまたさわやかな笑顔で答えた。

「あ、あたしもたまたまだよ。知り合いに誘われてね
うん、うそじゃない、たまたまだし。観客としては来るの初めてだし。
ひらり、とだいぶ先にあるあたしが座つてた席へと視線をやる。
もしマケンドーに見つかつたら、怒られるだろうな、どころか…ア
マツカ君に会えなくなるかもしれない。それは困る。早く席に戻ら
ないと探しに来られたら困るし、でもせつかくアマツカ君と会えた
から、もう少し一緒にいたいし。

「うん、そつか。じゃあ、またね、カケリ」

「え、あつかアマツカ君？！」

さわやかスマイルで、ひらりと片手を擧げると身を翻してアマツカ君は客席の向こうへと走り去つてしまつた。追いかける余裕もなくて、あたしは開いたままの口でぼーぜんと立ち尽くしていた。風のごとく現れて去つてしまつアマツカ君。

あ、もしかして知り合いといふて言つたから、氣を使つてくれたのかな…でもここに觀に来ているのなら、また会えるかも。ううん、ここじゃなくてもまたどこかで会えるかも、そんな気がする。

運命の相手つてやつこいつもんだよね！

「おい、なにをにやにやしているやつをから！」

「つぐわつ」

客席についてから、ずっとにやけていたらしこあたしの表情に、マケンジーがつっこむ。いつのまんなに顔に出ていたかな？
出でいるよね、自分でもわかるわ。ああでも自然とにやけるよ、

うへへ、アマツカ君♪

「なにか嬉しい事でもあったのじょつか？」

「えつえええつと、それは……」

しどのもどりになるあたしに、マケンジーが疑惑の顔になる。

「お前まさか、知り合いと立ち話でもしていたのか？」

ぎくぎくー！

マケンジーとは契約期間中は、知り合いとの関係ももつなつて言わ
れてるんだよね。アマツカ君のことは絶対にばれてはいけない。

「つづん、そうじやなくて、その…すこしくおいしいジユース見つ
けてね、それで」

なんかすこく苦しい言い訳になつたんだけど、あわわわわ。

「どのよつな味のジユースですか？」

横のカツさんのシックノリにあわわわわと内心焦る。そんなつっこま
ないでくださいよ。

「ええつと（さすがにオレンジジユースとかだとつべくせこし）、
えつとですね、なんといつか不思議というか、トロピカルな味わい
といつか…」

そんなジユースあとで教えるとか言われたらどうしようかとかね、
もうパニックになりつつ言い訳する。

「なるほど、好みの味を見つけると幸せになりますよね」

よかつた、カツさん、詳細訳ねこなくて。

「単純な奴だな、お前は」

「つ、うるさいこいつ、いいじやないか、おいしこもの好きなんだよ
ありもしないジユースのことで意地になるのも馬鹿馬鹿しいね。

「まあここに知り合いで出会つてもおかしくないだろうが、余計な話などするなよ。挨拶程度に留めておけ」

「はいはい、わかりました」

アマツカ君のこと、マケンドーにはばれないようには気をつけないとね。…まだどこかで会えるといいな。…また一人つきりで。うん? そういうばいいつも会つときは「一人つきりだった。ひやつ、なんだか秘密の関係みたいでどきどきするかも、どきどきする!」

「さて、レースも見終わったことだ、戻るぞ」

すっくとマケンドーが立ち上がる。

「え? 次のレースがもうすぐ始まるんじゃ?」

「中央東がすんだからな。今日の目的は果たした。時間は有効的に使わんとな。帰つてすぐにトレーニングだカケリ」
うへー。のんびりできるわけではないのか。…まあそれが目的とは言つてたけど。

中央東のテンカワさん、さすがチャンピオンだけあってぶつちぎりの速さだった。

「不安か?」

心を見透かしたようなマケンドーの言葉に、あたしは「そりや」と頷く。

「勝てる気がしないんだけど、テンカワさん!」

素足でなら速く走れるといつても、あの走りに全力でも敵わない。それはあたし自身だけじゃなくてマケンドーだって感じてる事だと思う。

「なら不安を感じなくなるくらいトレーニングに励む事だな、その他の事は俺にまかせとけ」

「えつあつ」

「こつまでのんびりしていろ。ひとつ戻るぞ」

「鋼鉄の天使のレース観戦してきたのか」

モリオカさんとトレーニングの合間にした会話に、
テンカワさんの話題が出た。

「あ、はい。テンカワさんのこと、知ってるんですか？」

「いや知り合いではないけれどね、レースは見にいった事があるから

なるほど、それなら知つてもおかしくないよね。あたしは見にいくまで知らなかつたけど。

「す、すごい速いんですよ、さすがチャンピオンといつか」

「自信なくしたのかし?」

……そもそも自信なんでありませんけど、あたし素人中の素人だし、
なんで、マケンドーはあたしを馬に選んだのか、いまだにわかんな
いけど。

「力をつけねば自すと自信はついてくるものさ。それにはひたすら努力するほかない。鋼鉄の天使の子だつて最初から速かつたわけじゃないと思うぞ。あの足に慣れることや、速く走ることに努力してきたに違いない」

義足つて言つてたし、自分の足じやない足で走るのつてそこに至るまで大変な努力があつたのだろうな。あんなに早く走れて、涼しい顔でいられるのも、そこにたどり着く為に流した汗だつてとんでもないに違ひない。特別に見えていたテンカラワさんが少しだけ近づいて思えた気がした。

「きっと区長もそういうことに気がついてほしくて、レースを見せに連れてつたんじゃないかな？」

若草の勝利にこだわるマケンドーが、あたしが自信失うような選択なんてするとは思えないし、…でもだからってテンカラワさんのレスを見て、あたしが高みに昇れるなんて展開には確実になるわけがない。

あたしはまだマケンジーのことを全くわかっていないんだよな。

「カケリちゃん！」

トレーニングが終った直後、モリオカさん退出後に入れ替わりで現れたのが、ショーリン君だつた。外の窓から泥棒みたいに入つてこなくとも…。

「大丈夫だつた？！」

すぐ心配気な顔であたしのほうへと駆け寄つてきた。ああそういうば縁丘の区長に拉致された時以来だ。

「ほんとごめん、おれがついていながらカケリちゃんを危険な目にあわせちゃつて」

「いいよ謝らなくとも、なにもなかつたんだし。それよりショーリン君のほうこそ大丈夫だつたの？」

「おれは怪我したつてかまわないけどさ、悔しいよ、カケリちゃんを守れなかつた事が…」

「ああそんなもう気にしなくていいからほんと、二人ともこうして無事なんだしさ、ね！」

キリキリと悔しそうな顔で俯いていたショーリン君が顔をあげる。でもその顔はほっとしたものではまったくなくて、どこか不機嫌を思わせるような顔つきで。

「カケリちゃんは兄上が助けに来てくれるからつて信じていたから平氣だつたのか？」

「え？ いや信じていたからつて言つたか、まあ結果助けに来てくれたけど」

実際助けてくれたのつてウミコさんなんだけどね。もしウミコさんが味方じゃなかつたら、マケンドーが助けに来てくれてたんだろうか？

「兄上の事信じたつて後悔するだけだよ、あのさカケリちゃん、マジで兄上のこと信じるのやめなよ」

冗談ぽくなく、怖いくらい真剣な表情でショーリン君はそう言つた。そういうえば、ショーリン君あの時もマケンドーのこと悪く言つてた。マケンドーはカクバヤシの出来損ない、恥すべき存在だつて。それつてどういうことなんだろう？ でもショーリン君そんな言い方する

のつてつまり、…ショーリン君はマケンドーに裏切られたことがあるからってことなのかな？

「ショーリン君は、マケンドーに裏切られた事があるの？」

「聞いてもいい事なのかな？」と恐る恐るとたずねてみた。

「そうだよ、裏切られたね。あの人は学歴だつて三流だし、エリート街道をひた走ることが義務付けられてるカクバヤシ家に泥を塗つたも同然なのさ」

エリート街道を踏み外したつてことがマケンドーを許せない理由？失敗を許せないなんて、厳しすぎる家柄なんだな。

「信じるに値しない存在だつてわかつただろう？」

「えつ、ああ、うん…」

ショーリン君の迫力に押されて頷くしかなかつたけど、ショーリン君ちょっと厳しすぎるよ。

「なんだ？ ぼーっとして、臆したか？ カケリ」

マケンドーの声であたしはハツとして顔をあげる。隣に立つのはマケンドーで、レース本番へと向かう通路の途中だ。

「テンカワさんはテンカワさん、カケリ様はカケリ様です。」自身の力を信じてがんばつてください

にこりと優しく微笑むカツさんに、「はい」とあたしも笑顔で返す。「いや別にテンカワさんことを考えていたわけじゃないんですけどあたしが考えていたのは先日のショーリン君の言葉だ。

マケンドーを信じるなと言つたショーリン君の言葉の意味を考えていた。具体的なことはわかんないけど、ショーリン君はマケンドーが犯した失敗を許せないんだろう。信じるに値しないとかちょっと言いすぎなんじやとも思つたけど、…あたしは結局マケンドーを信頼しているのだろうか？

「失敗を恐れるな、もしつまづいてもそこから立ち直ればいい。確実に踏み進めることを考える。最初からぶつちぎりで強い者などない。チャンピオンのテンカワにしてもそうだろう。お前も上を目指

せる可能性はあるのだからな」

きっと、ショーリン君とマケンドーは考え方が違いすぎるんだろうな。マケンドーのその言葉を聞いてあたしはそう思った。

「わかつてゐよ、じやあ行つてくれる」

一個人として、マケンドーのこと信頼しているかどうかは置いといで、レースに関してなら、あたしはマケンドーを信頼しているのだろう。じゃなきゃ、こうして走ることなんてできやしない。

若草の郊外にある靈園。そこにはマケンドーはいた。

その日は彼にとつては特別な日だった。公務は午前中で切り上げて、その日は欠かさずある者の墓前へと参つっていた。線香と花を添え、静かに手を合わせる。

そこに眠るは、マケンドーの剣の師であり、実際は剣だけに留まらず彼の人生の師でもあった。元軍人であり厳しい環境に常に身を置き生きてきた師。彼には優しさなど欠片もなかつた。常に厳しく、鋭く研がれた刀の刃のような人間だつた。眉間にしわ寄せ、恐いと思われるような人相で、身内ですら近寄りがたいような人だつた。マケンドーがカクバヤシ家の人間であつても、特別扱いなどなく、非情なまでに厳しく冷たく指導してきた。

この世を去つてもう七年は経つ。この世から去つても、彼は強く生きていた、マケンドーの心の中に。

「師匠、…俺は少しでもあなたに認めてもらえる人間になれたのでしようか？」

物言わぬ墓石へと、マケンドーは一人つぶやいた。

第七話 嫌な予感、アイシのピンチ？

今日のレースも無事勝利して終了。

最近レース会場に来るのが楽しみで仕方ない。理由？ それはもちろん天使君ことアマツカ君に会えるかもしれない場所だからね。今日は会えなかつたけど、会場のどこかにいたりするんだろうか？ ああでもあの時もたまたまつて言つてたから、またここで会えるとは限らないだらうけど。うん、予感つていつの？ 感じるんだよね。

駐車場へと続く通路を歩いている最中に、突然マケンドーがピタリと立ち止まつた。

「カツ、カケリを連れて先に戻つてくれるか？」

マケンドーの発言にカツさん少し驚いていた。なにも打ち合わせてなかつたみたいで。

「心配するな、野暮用だ。かまわず戻つてくれ」

「は、はい。ではまいりましょうか、カケリ様」
マケンドーとカツさんそれぞれ背を向けて歩き出す。カツさん、ちよつと心配そうな表情に見えた。なんなんだろ？ でもあたしは特に気にせず、カツさんとそのまま屋敷へと戻つた。

まさか、あんなことになるなんて、想像もつかなかつたからね。

カツやカケリたちとは反対方向へと向かうマケンドー。

「コソコソと最近俺の周りを探つっていたのはお前か？」

誰もいない通路、コンクリの壁にマケンドーの声だけが響く。

鉄の管の向こいつ、ゆらりと人影が動いた。それをマケンドーは見逃さない。

「待て！」

追いかける。逃げるのは少年だ。最初は距離を離されるばかりだつ

たが、突然少年は「うつ」と呻いて足を縛れさせスピードを落とした。そのすきにマケンドーが距離を詰める。

「お前、足を痛めているのか？」

膝を押さえながら体を起こす少年を見て、マケンドーが訊ねる。

「待て、逃すか」

片足を壁のよじにして少年の前に出し、マケンドーが行き手を遮る。

「お前、何者だ？　どこの回し者だ？」

「じめん」

小さくやつづぶやいて、少年は素早く後ろ向きに飛んで、マケンドーから逃れる。

「待て」

振り返るマケンドーは、今度は別の人間にその行き手を遮られた。

「カクバヤシ・マケンドー、悪いが少し付き合つてもらおう」

「！？　なに？」

ズラリと屈強な男たちにマケンドーは囲まれていた。

「人質もおさえてある。抵抗はお互いのためにならない」

「（人質？　まさか力ケリたちが？！）」

ギリッと悔しそうに歯噛みしながら、マケンドーは男たちに従った。

「ゲ、兄上！？」

マケンドーは地下の狭い一室へと連れてこられた。そこで彼を田にして驚きの声を上げたのは見知った相手だった。なぜお前が？と互いに怪訝な顔で見やる。

「ショーリン、お前がなぜここに」

背後の唯一の出入り口が閉められ、ガチリと鍵がかけられる音が響いた。

そのことよりも田の前の弟を見据える。

より不満そうな顔をしているのはショーリンのほうだった。

「ちつ不意打ちとか、男のすることじゅうねーよ、卑怯者のくそつた

れどもが

「ふ、不意打ちでやられたのか、情けないやつだな」

「なんだと？！」

カツと血が上り、ショーリングがマケンドーの胸元に掴みかかる。
「少し落ち着け。お前までなぜここの連れてこられた？連中は何者
だ？心当たりはあるのか」

ぎゅっと唇を噛みながら、ショーリングは掴んでいた手を離す。

「さあ、知らないよ。兄上にこそ心当たりがあるんじゃないか？
いっぱい敵いるみたいだし。とんだとばつちりだよ」

心当たり、…あるとすれば。

カクバヤシ家に恨みでもあるのか、それとも。

あの少年は何者だったのか。最近自分の周りを探られていたことこ
マケンドーは気づいていた。

カクバヤシに強い恨みを持つ者か…。心当たり、あるにはあるが、
確証はまだない。

帰宅して、あたしを下ろしてからカツさんは慌しく出駆けて行つた。
いつも落ち着いたカツさんにしてはめずらしくなと思っていた。そ
れでもあたしはその時さほど気になじめないで、いつものように食事
して眠つて、朝起きたらいつものようトレーニングルームでモリ
オカさんとトレーニングをやつていた。

その日もそのまま終つて、終るだらうと思つていた。マケンドーと
その周辺で大変なことになつてたなんて、思いもしなくて。
朝から忙しなく携帯で連絡を取つてゐるカツさんが目についた。マ
ケンドー、見てないな。ふと気になつてカツさんに聞いてみた。
「マケンドー様のことなら心配ありません。カケリ様はご自分のこ
とに集中されてください」

にこり、と笑顔でカツさんはそう答えたけど、あれ、なんだかう。

変な感じだ、こういうのって、あれだ。

胸がざわづくっていうの？ 嫌な予感つて言うの？ そんな感じ。

「はー、よりによつて密室で一緒に閉じ込められたのが兄上なんてや。…どうせならカケリちゃんと閉じ込められたいよ。おれの姿が見えなくて今頃心配させちゃつてるかもなあ」

「安心しろ、それはないだらうからな」

「へえそつかな？ 兄上のほうこそ心配されてないんじゃないの？ むしろ、いなくなつてせいせいしているだらうね」

「……」

「あれ？ もしかしてちょっとシヨックうけてたりするの？ 兄上もしかして、カケリちゃんのこと結構本氣だつたりするんだ？」

「つるさい、少し黙つていろ。ムダに体力消耗するな

ちつ、舌打ちしてショーリンは冷たい壁にもたれる。

誘拐されて、二人してこの狭くて冷たい密室に閉じ込められて、何時間が経過しただらうか。険悪な兄弟が嫌でも二人つきりにさせられて、衝突をさけるほうが困難だつた。イラついていたのは弟のショーリンのほうだつた。よほど兄のマケンドーと一緒にいるのが不快らしい。

マケンドーにも焦りがないわけはなかつたが、ショーリンほど乱れてはいなかつた。不思議と精神に余裕を持てた。昔じいってくれた師匠のおかげかもしれない。

それにカクバヤシの人間が一人も行方不明になれば、氣づくものは多数いるだらう。マケンドーの場合はカツが上手く立ち回つてくれているだらうという安心があつた。が長くこんなところで閉じ込められているわけにはいかない。

「連中に付き合つてやるとするか？」

「はあ？」

敵を探る。その心でマケンドーは連中の動きを待つた。謎の男たちは顔を覆面で隠し、屈強な体で威圧してくる。

「来い」

乱暴に連れられ、腕を縛られ隠しをされた。別の部屋へとマケンドーだけが連れて行かれた。こんな状況でもマケンドーはパニックを起こさなかつた。感覚を研ぎ澄まして、連中が何者なのか?なにが目的なのかを探ろうとする。

一人部屋に残されたショーリンの元にも、迎えの男たちが現れた。警戒の構えをとるショーリンに対し、男の一人が携帯電話を目の前に差し出してきた。怪訝な顔を崩さないショーリンだが、男に電話に出るよう言われ手に取る。

電話の声は自分が知る相手だった。その相手に驚きの声を上げた。

「ユキちゃん?!」

『ショーリン君? 大丈夫? あのね、すぐに帰してもらえる様に、手配してもらつたから、だから大丈夫だから、安心して』

付き合いのある青原市出身のアイドルの少女、ミナミ・ユキの声だつた。彼女はショーリンの数多くいるガールフレンドの一人になる。まさかの相手にショーリンは驚きを隠せない。

「待つて! 今回の件、まさかユキちゃんが関係してるの?」

『違うの! ショーリン君と急に連絡取れなくなつて、心配して、事務所の社長に相談してなんとかしてくれることになつて。学校のほうにも対応済みだから。今回の事は忘れてほしつて』

「なにそれ? 話が全然見えない、どういうこと? そつちの業界が絡んでるつてこと?」

『違う、そうじゃなくて、あの…ごめんね、私もよく知らなくて、それに話しちゃダメだつて言われて』

言葉途切れ途切れに嗚咽が混じるのを聞いて、ショーリンも彼女の心情を察する。

「『めん、わかつたなにも聞かない。じゃあおれは無事にここから帰れるんだね』

電源を切り、男に電話を返す。そのまま男たちに連れられショーリンは部屋を出た。

ショーリンはあつさりと帰された。がマケンドーだけはそつはいかなかつた。元々連中の目的はマケンドーでしかなかつたようだ。ショーリンは人質といつ名田で連れられてきたようだつた。

「くつ」

皮を打つ音が室内に響き、マケンドーのうめき声が零れる。体の自由を奪われ、視覚も奪われた状態で、肉体を痛めつけられている。ひゅつと空を切る音がして、それがマケンドーの体を打ち続ける。衣服は乱れ、皮膚は痛み、赤い染みがじわりと広がる。打たれるたびに体がゆれ、汗や血といつた体液の零が舞つた。

「そろそろ我慢の限界ではないのか？　早く返事をしないと氣を失うぞ」

暴力を振るう男の声、がマケンドーは男の言ひ返事とやらはまだしていない、するつもりもないようだ。田嶺しをされたままの顔でにやりと不敵に笑う。

「ふ、この程度で俺が屈すると思つたか？　残念だが、お前らの望みどおりには動かん」

「やれやれ、まだ足りないようだ」

びゅつ、鋭い空きつ音がして、直後マケンドーを激しい痛みの打撃が襲う。

「ぐう」

これしきなんてことない！マケンドーは心でつぶやく。なんてことはない、歸匠のじいきに比べたら痒いものだ。思い出しながらマケンドーの顔には笑みが浮かぶ。痛みに苦しみもがく姿を見せはしない。そのマケンドーの姿に歯がゆく思つのは、田の前にいるマケンドーを痛めつけている男…ではなく、隠しカメラのモニターの向こ

う側にてこここの様子を眺めていたある男だった。

「気にいらん。どうすれば這い蹲る？」

ぎりつと歯軋りして、憎々しげにモニターに映る痛々しいマケンドーを睨みつける。

男の携帯の呼び出し音が鳴り響く。着信を見ずとも相手はわかる。通話ボタンを押し、出る。

「どうした？」

不機嫌を隠さない低い声で通話する。

『秘書の男が動いています。すぐに感づかれるかも』

チツと男の口から舌打ちが漏れる。通話相手は声の感じからして若そうな男の声だ。この男の部下の者だろうか。

「カツとかいう男か。足止めして時間をかせいでおけ」

『……』

「どうした、返事は？」

『はい……わかりました』

ぴつ。通話を切り、男は再びチツと舌打つ。

「かわいげのない犬め」

トレーニングを終えて、あたしは部屋へと戻った。食事を済ませて、入浴で体を休めながら、ずっと気になつて居るのはマケンドーのこと、そしてカツさんのこと。

心配いらないって言われたけど、マケンドーの姿あれから一度も見ていかない。マケンドーがいることもあってカツさんいつも以上に忙しそうにしていたし、邪魔はできないし。

だけど…

「だいじょうぶ、なのかなあ…」

ベッドに腰掛けながら、声だけでもかけに行こうかななんて考え出した頃、室内の電話が鳴った。こんな状況だからかなりびくんって驚いて、あたしは受話器を取る。

『カケリちゃん？ おれだけど…』

「シヨーリン君！？ こんな時間にじびつしたの？」

なんだろ？ なんか妙に心臓がばくつこてる。シヨーリン君の用事つてなんなんだろ？

『あー、うそ、その、や…』

電話の向こうのシヨーリン君の声のトーンがいつも以上に低くて、だからか余計に不安な気持ちが増していくんだけど。

「なに？ シヨーリン君なにかあったの？」

『カケリちゃんおれのこと、心配してた？』

「へ？ …なんで？」

『…うよつと前までおれ、監禁されててわ』

え？ なことさらっとんでもない」と言わなかつた。シヨーリン君。

「か、監禁つて？ 大丈夫だつたの？」

『まあなんとか、おれのほうは…』

後半言葉を濁すシヨーリン君、まさか？

「マケンドーも一緒に？…」

『…まあね、でもさすがに命の危険とかはないと思つし』

「待つて！ すぐカツさんに伝えなくちゃ」

あたしは急いでカツさんのもとに走つた。

「カツさん… マケンドーが！」

マケンドーの名前を耳にしたとたん、カツさん素早く反応した。

「マケンドー様が見つかつたんですか？…」

「う、うん、あたしが…じゃなくてシヨーリン君から」

「ありがとうございます！ すぐに迎えにいきます」

カツさん身支度も整えないで、そのまま車のほうへと走つて出で行つた。

大丈夫、なのかな。もうこんな時間だし…、明日はレースだし、ちゃんと間に合つよね？

このまま部屋に戻つて休むべきか、それともカツさんについていくべきか。急にその選択肢で迷つて。たぶんこには、カツさんにおまか

せて、あたしは戻るべきなんだろうけど…。

だめだ、まだ不安な気持ちが晴れないままだ。なにもないだらつてショーリン君言つてたみたいだつたけど…、だけど、監禁されたなんて、なんかただ事じゃないんじやないの？
迷いながらもあたしの足は駐車場のまづくと動いていた。

「カケリ！」

屋敷を出てすぐ、「あたしを呼び止めたその声は。驚いて目を見開く、どうしてここにいるの？」

「アマツカ君…？」

暗がりの中、うつすらと浮かび上がつてくる顔。偶然もここまで続くともう運命と断定せざるをえないかもと、いや、そんなときめいている状況でもないんだけど。カツさんを追いかけなきやと思つ気持ちと、アマツカ君と話したい気持ちとで新たな迷いが生まれる。

「カケリ、お願ひ。あの人を止めて」

「え？」

あの人ってカツさんのこと？

アマツカ君の真剣な眼差しはカツさんのことを心配してくれているようだつた。もしかして、カツさんの身に危険が？

「うん、わかつた。ありがとうアマツカ君！」

結果あたしの迷いは晴れた。アマツカ君が晴らしてくれた。裸足になつてカツさんを追いかけた。
ちょうど車を発進する前だつた。

「カツさん！」

「カケリ様？！…どうし…」「あたしも一緒に行かせて！」

一瞬驚きの顔を見せたけど、カツさんにこつと頷いてドアロックを解除してくれた。

マケンジーを捕らえている男たちの元に一つの指示が届いた。

撤収の指示だつた。五分も経たない間に男たちは皆姿を消した。マ

ケンドーは抱がれ別の場所へと運ばれた。意識は朦朧としていた。どこへ連れて行かれるのかも見当がつかず。完全に意識を失い、冷たい壁にもたれやがて冷たい土の上に倒れこんだ。

「…う、じじは」

痛みがビシビシと走る。田隠しを外すと、そこはまだ暗闇で。屋外にいた。空はすっかり闇色だ。数メートル先に地面を照らす灯りがあつた。どいかの公園の公衆便所のすぐわきに倒れていた。気を失っている間に移動させられたのだろう。まるで狐に化かされた様な状態だが、走る痛みは現実にあったことなどと証明している。あの謎の男たちは存在すらもう近くに感じない。なにが目的だったのか？

こんなところで考え込んでいても時間の無駄だ。マケンドーは体を起こし、カツと連絡の取れるところまで移動する。

移動中にカツさんの携帯が鳴って、それがマケンドーからだつた。公園の近くで、一人立っているマケンドーを見つけた。

「マケンドー様！」「無事ですか？」

カツさんがマケンドーに駆け寄る。あたしもカツさんと一緒にアイツのそばへ。

「ああこの通り生きている」

そんなこと言われなくともみりやわかる！ カツさんが聞きたいのはそんなことじゃないでしょ。

「カツさん本当に心配していたんだからね！ 一体今までどういたのよ！」

「悪かったな、お前にも心配かけたか

「は？ べつ別にあたしはマケンドーのことなんて心配してないしね、ほら、なんかあつたらうちの親金の亡者だから、いろいろとめんどうっていうか、あたしも自由になりたいし」

心配くらうするつづーの、こんな奴でもなにがあつたら氣分悪いし、

人として！

「俺はカツを信じている、カツも俺を信じてくれている、だから心配などない」

カツさんとマケンドー、一人の絆は簡単に切れないし計れない…のかな。

「こんなところで長話している暇はないだろ？ 戻るぞ」
わざわざ車へと向かうマケンドー。監禁されていたって聞いたのに、何事もなかつたかのように振舞つて…、たいしたことなかつたのかな、ならいいけど。

「明日はレースだからな、準備にぬかりはないだろ？」「やつぱりマケンドーはマケンドーだ。監禁されている間もずっとレースのことでも考えていたんだろうな。ほんと、変に心配して損したよ。

あ！？ そういえばアマツカ君、どうしてあんなところにいたんだろ？？ それにカツさんのこと知っていた？
アマツカ君のこと気になつていていたけど、屋敷に戻つて注意深く探してみたけどそれらしき人はもう見当たらなかつた。マケンドーがカツさんの関係者だつたりするのかな？ でもだつたら、もつと堂々と会えてもよさげなんだけどな。まあ、会えるよね？ また近いうちに、そう信じているからね。

カケリが想うアマツカは、ある邸内にいた。カクバヤシの別邸に負けず劣らずの剛健で豪勢な邸内は、権力者の象徴とも言える。通路を歩くアマツカの表情は、無表情に近かつたが、どこか沈んでいるようにも見えた。

「おかえりなさい」

前方から聞こえてきたその声へと反応するよつに、アマツカは顔を上げた。前方より自分を迎えてくれたのは無表情に近い顔をしつつも、わずかに笑みを見せてくれた少女。

「ただいま、テンカワ」

アマツカがテンカワと呼ぶのは、あのテンカワだ。中央東の馬、鋼鉄の天使ともてはやされているチャンピオン…テンカワ・ワタル。

「ねえ、…大丈夫なの？ 体の具合悪くは」

テンカワはアマツカの顔をのぞきこむ。純粹に彼を想いやる表情で。

「大丈夫だよ。全然なんともないよ」

優しい笑顔で答えるアマツカ。それにテンカワは「そう」と小さく答えた。自分の横を通り過ぎ、彼は向かう。

「待つて！」

振り返つて呼び止める。普段大人しい彼女にしてはめずらしく語尾が強まる。

「の方に報告に行かなくちゃ。テンカワはゆっくり休んでなきやだめだよ。明日はレースなんだから。油断できない相手だから」

「ねえ、もう…」

必死の眼差しの向こうにある彼女の想いを、アマツカは痛いほどわかつていた。それでも、止まるわけには行かない。アマツカにはアマツカの譲れない想いがあるから。

誰の制止だろうが、振り切る。強い決意で、アマツカはそこへと向かつ。

「酷い…、マケンドー様、痛みは？」

自室に戻り、上半身裸のマケンドーの体を見たカツが、痛々しい姿に顔を歪める。生々しい傷跡が彼の体に刻まれていた。「平気だ」とは言うが、その額には脂汗が浮いている。簡単な手当てをして、痛み止めを打つたが、とても平気に見える状態ではなかった。

「明日はレースだ。治療など後回しでかまわん。それに、職務もたまってしまったしな。傷など時が治してくれる」

弱音は吐かない、けして。マケンドーの根底にあるのは亡き師匠の教えだった。心配ははれていないが、ひとまずカツは安堵する。

「で、連中についてわかつたのか？」

「ええ、証拠はつかめてはいませんが、思い当たるのは…」

「少なくとも、犬の顔は覚えた」

マケンジーがなにもない空間を見つめながら、目を細める。そこに思い描くは自分の周りを探つていたあの少年の顔。カケリが運命の相手だと思い込んでいる、謎の美少年アマツカと瓜二つだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4327z/>

馬 駆ける

2011年12月17日19時45分発行